

新嵐山スカイパーク再生基本計画

(案)

令和 7 年12月

目 次

I 計画策定の目的	1
II 前提条件の整理	2
II - 1 グランドデザインの概要	2
II - 2 基本構想の概要	3
(1) 基本構想策定の目的	3
(2) 基本構想の位置づけ	3
(3) 新嵐山スカイパーク再生の基本方針	3
(4) 機能ごとの整備方針	5
III グランドデザインにおける拠点施設導入機能の検討	7
III - 1 屋内遊戯施設の導入検討	7
(1) 類似施設の概要	7
(2) 類似施設の利用状況	10
(3) 類似施設周辺の圏域人口	12
(4) 想定利用人数の検討	18
(5) 屋内遊戯施設の導入検討	20
III - 2 拠点施設における導入機能の整理	21
IV 新嵐山スカイパーク全体再整備計画	22
IV - 1 全体再整備の基本的考え方	22
IV - 2 目標利用人数の設定	26
(1) 既存データの整理	26
(2) 目標利用人数の設定	33
(3) 月別利用人数の検討	38
IV - 3 施設規模の検討	39
IV - 4 配置計画と動線計画	42
IV - 5 全体再整備計画	43
(1) スキー場	43
(2) キャンプ場	43
(3) 屋外遊具エリア	48
(4) 駐車場	48
(5) 展望台	48

V 拠点施設整備計画.....	49
V – 1 拠点施設整備の基本的考え方	49
V – 2 配置計画.....	50
V – 3 平面・立面計画	51
V – 4 面積表	53
VI 事業計画の検討	54
VI – 1 概算事業費	54
VI – 2 運営収支概算	55
VI – 3 事業スケジュールの検討	56
VI – 4 事業手法	57

I 計画策定の目的

新嵐山スカイパークは、芽室町の個性を体感でき、町民にとっても誇ることのできる憩いの場であるとともに、本町最大の観光地であり、着地型観光を推進するための中心的な施設（観光拠点）である。これらの目的・役割・機能発揮のため、早期の再生を目指すことが必要である。

芽室町では、令和5年度に「新嵐山スカイパークのあり方の骨格」及び令和6年度に「新嵐山スカイパークのグランドデザイン（全体的な構想）」（以下、「グランドデザイン」という。）を策定するとともに、令和7年5月には「新嵐山スカイパーク再生基本構想」（以下、「基本構想」という。）を策定し、新嵐山スカイパークの再生に向けた基本方針及び整備方針を明らかにしたところである。

本計画はこれらの計画や基本構想に基づき、新嵐山スカイパークの再生に向けて、各施設の目標入込客数を設定するとともに、概算事業費、維持管理費、運営費など事業性を考慮した適切な施設規模を検討した上で、新嵐山スカイパークの再整備に係る基本計画として策定することを目的とする。

II 前提条件の整理

グランドデザイン及び基本構想における整備方針や導入機能、施設規模、全体事業費等の内容について整理する。

II-1 グランドデザインの概要

グランドデザインでは、新嵐山スカイパークについて、①スキー場（リフト更新検討、自転車等夏季利用）、②キャンプ場エリア（コテージ整備、オートサイト機能移転）、③パークゴルフ場、④駐車場（イベント利用可）、⑤センターハウス（ロッジ（軽食）、スキーパトロール等）、⑥拠点施設（屋内遊戯施設、飲食、売店）、⑦屋外大型遊具、⑧ドッグラン、⑨民間活用ゾーン（第3駐車場）、⑩民間活用ゾーン（旧オートキャンプ場）の10のゾーニングが示されている。

図表 新嵐山スカイパークグランドデザイン 配置図



II – 2 基本構想の概要

(1) 基本構想策定の目的

新嵐山スカイパークは、「芽室町新嵐山スカイパーク設置条例」に基づき、「町民の健全なレクリエーションと健康の増進及び観光の振興」を目的として設置されており、国民宿舎新嵐山荘、メムロスキーランド、新嵐山キャンプ場、新嵐山展望台等の施設があり、町内外から多くの方に利用されていましたが、指定管理者である第三セクター「めむろ新嵐山株式会社」の経営破綻により、令和5年10月に営業を停止し、施設の利用を休止した。

町は、新嵐山スカイパークの再生に向け、「新嵐山スカイパークのあり方の骨格」（令和5年度）及び「新嵐山スカイパークのグランドデザイン（全体的な構想）」（令和6年度）を策定し、新嵐山スカイパークの再生に取り組むこととした。

これらをふまえ、新嵐山スカイパークの基本的な整備方針を明らかにし、「(仮称)新嵐山スカイパーク再生基本計画」につながる「新嵐山スカイパーク再生基本構想」を策定するものである。

(2) 基本構想の位置づけ

新嵐山スカイパークは、「第5期芽室町総合計画後期実施計画（令和5年度～令和8年度）」において、本町最大の観光地であり、着地型観光を推進するための中心的な施設（観光拠点）に位置づけられ、芽室町観光ビジョン（令和6年5月策定）において、「新嵐山スカイパークを再生し観光の拠点化とすること」と「新嵐山展望台からの風景を観光シンボルに設定する」などが位置づけられている。

基本構想は、総合計画の実現に向け、観光ビジョンや新嵐山スカイパークの再生に向けて定めた「新嵐山スカイパークのあり方の骨格」及び「新嵐山スカイパークのグランドデザイン（全体的な構想）」をふまえ策定されたものである。

(3) 新嵐山スカイパーク再生の基本方針

① 基本的な考え方

グランドデザインで定めた『「みんなが集い・遊び・憩う」新嵐山スカイパーク～30年後も笑顔が集まる風景～』に基づき、町内外から多くの方が集い、遊び、憩う場所を目指すとともに、将来にわたっても持続可能な施設運営を目指し、再生に取り組む。

また、新嵐山スカイパークの恵まれた自然環境を守り、維持するとともに、町と民間事業者が連携し、貴重な資源として活かし、公園機能やスキー、その他のアクティビティなどの「アウトドア・アクティビティ」をグリーンシーズンやウインターリー

ズンで一年を通して気軽に体験でき、多くの方で賑わう環境（一年を通して賑わうアウトドア・アクティビティ体験施設）を目指す。

② 利活用ゾーンの考え方

町として利活用を進める公園機能、民間活用により利活用を進める観光機能、拠点となる機能については、「新嵐山スカイパークのグランドデザイン（全体的な構想）」に基づく。

③ 施設整備の考え方

1) 優先度の明確化と町財政の負担軽減及び運営の効率化

限られた財源のなかで、これまでいただいた要望や提案、提言等をふまえ、利用状況や今後のニーズの変化、将来にわたる町財政の負担も考慮し、優先度を明確にして整備を行う。

また、国や北海道等の制度と連携するほか、公設民営や民設民営などさまざまな手法で民間活力を活用し、町財政の負担軽減を図るとともに、可能な限りエリア内の老朽化した施設の統廃合を進め、管理運営の効率化を進める。

2) 安全・安心な施設

年齢や障がいの有無に関わらず誰もが利用できるようユニバーサルデザインの視点を取り入れ、安全・安心に使いやすい施設とする。

3) 安定的な施設運営

新嵐山スカイパークは、グリーンシーズン・ウインターフィールドと通年での運営を行いますが、メムロスキー場では索道（リフト）の運行で経験年数に基づく資格が必要となるなど、1年を通して安定的な施設運営をするためには、資格を有する人材の確保等で民間活力を活用する必要であり、民間事業者と連携して施設運営を行う。

令和7年度時点では、メムロスキー場を含め、施設の維持管理委託により施設運営を行っているが、令和8年度以降は資格を有する人材確保のため、1年を通して指定管理者制度による施設運営に移行する考えである。

(4) 機能ごとの整備方針

機能	考え方
宿泊	<ul style="list-style-type: none"> ・国民宿舍新嵐山荘は、建物や設備の老朽化が進み、施設全体の再開は困難 ・これまでの営業において宿泊部門は最大の不採算部門となっており、経営面を考慮しても、大規模改修やリニューアル工事を行つたうえでも再開は困難なことから、宿泊機能は「キャンプ」で検討するとともに、民間活用ゾーンでの民間活力の活用を検討する ・景観や防犯、利用者の安全上からも、国民宿舍新嵐山荘については、施設の解体撤去を想定して進める
キャンプ	<ul style="list-style-type: none"> ・旧オートキャンプ場のオートサイト機能の移転を検討するとともに、コテージの整備を検討する
温浴施設	<ul style="list-style-type: none"> ・温泉の掘削が難しいことや、大浴場の維持管理コストを含め、町での設置、運営は難しく、整備は困難 ・民間活用ゾーン等において、幅広く民間事業者から利活用を募る際に温浴施設設置の可能性も含め提案を募集する
飲食	<ul style="list-style-type: none"> ・飲食については、「集客機能」とあわせて検討する
売店	<ul style="list-style-type: none"> ・売店については、「集客機能」とあわせて検討する
スキー場	<ul style="list-style-type: none"> ・スキー場は、社会体育施設に類する機能として今後も継続する ・設備や機械など、老朽化が進んでいるが、いずれも安全・安心にスキー場を利用いただくために必要な設備、機械・備品であり、メーカー等による点検や修繕といった適切な維持管理を行う ・リフトは、中長期的な計画に基づく修繕を行うが、国の制度等を活用し、修繕費用と更新費用のコスト比較を行い、リフトの統合（更新）による維持管理、運営コストの軽減、利用者の利便性の向上を図る手法を検討するほか、夏季の運行についても検討する ・ロッジは、老朽化が進んでいることから、現在の施設は解体撤去を想定して進めるが、スキー場の運営や利用者に必要な機能であるため、新たなロッジ機能の設置について検討する ・有利な国の補助制度等の活用が可能で、運営における喫緊の課題解決と利用者の利便性向上につながる事業は、基本計画に反映が可能で、早期に実施することでメリットが大きくなるものについては、財源確保を条件に実施する

機能	考え方
フィールドを活用したサービス（ドッグラン、パークゴルフ場等）	<ul style="list-style-type: none"> ・パークゴルフ場やドッグランについては、それぞれ費用や配置、面積等を検討し、整備について検討する ・屋外大型遊具の設置やサイクリルツーリズムなどによる通年利用、アクティビティを検討する ・上記の検討にあたっては、国の制度との連携や民間事業者を募るなどの手法を検討する ・駐車場は、国民宿舎新嵐山荘の解体撤去後は第1駐車場と第2駐車場を一体で利用することが可能になり、イベント開催時における駐車場の利活用がさらに可能になるものと考えられるが、面積も広く、すべてを舗装化することは経費の面からも困難
展望台	<ul style="list-style-type: none"> ・再整備の要望が多い施設だが、「スキー場」のとおり、リフトの修繕または更新の検討の際に夏季の利用も検討することとしており、夏季の利用の際は展望台付近が乗降場所となることが考えられることから、リフトの検討とあわせて再整備の時期や配置場所等を検討する ・展望台は設置から30年以上が経過し老朽化が進んでいることから、リフトの更新や大規模改修の方針と連動した再整備を先行して実施する手法についても検討する
集客機能	<ul style="list-style-type: none"> ・屋内遊戯施設は、子育て環境の充実や町内外から多くの子育て世帯を呼び込むことができる施設であり、アンケート調査においても町内への設置を希望する声が多くあるが、市街地との距離、冬季の移動、子どもたちの日常の利用の点から、市街地への設置の要望もあり、新嵐山スカイパークの設置については、検討を行う ・飲食、売店については、屋内遊戯施設とともに整備することで通年での集客につなげるものであり、屋内遊戯施設の検討とあわせて設置を検討する
町民向けサービス	<ul style="list-style-type: none"> ・町民の皆さんの憩いの場、レクリエーションの場、冬のスポーツの場、子どもたちの教育の場として、機能ごとの整備方針に基づき検討を進めるが、多くの町民の皆さんに利用いただき、愛着を持っていただくことは町内外からの多くの誘客につながるものであり、町民の皆さん利用促進の観点からも、町民割（町民価格等）を検討する

III グランドデザインにおける拠点施設導入機能の検討

III-1 屋内遊戯施設の導入検討

グランドデザインにおいては、拠点施設のメイン機能として屋内遊戯施設を位置づけた。基本構想においては集客機能の中で「屋内遊戯施設は、子育て環境の充実や町内外から多くの子育て世帯を呼び込むことができる施設であり、アンケート調査においても町内への設置を希望する声が多くあるが、市街地との距離、冬季の移動、子どもたちの日常の利用の点から、市街地への設置の要望もあり、新嵐山スカイパークの設置については、検討を行う」とされている。

ここでは、拠点施設への屋内遊戯施設の導入について検討を行う。検討にあたっては、道内類似施設の事例を参考に、新嵐山スカイパークと芽室町市街地に整備した場合の想定入込者数を算出し、新嵐山スカイパークにおける整備について検討する。

(1) 類似施設の概要

① こども屋内遊戯場 キッズスクエア「ちっくる」

「こども屋内遊戯場 キッズスクエア「ちっくる」（以下「ちっくる」とする）」は、平成29(2017)年4月にオープンし、床面積600m²の屋内には道内最大級のネット遊具をはじめ、クライミングウォール、チューブスライダー、幼児専用コーナーなどがある。

ちっくるの隣には、高さ13m・幅58mを誇る国内最大級の屋外遊戯場「キュービックコネクション」が平成30(2018)年7月にオープンし、リングラダーやログスロープといった約20種類の遊具の他、周りにはブランコ、ロープウェイ、水遊び場、健康遊具がある。

- ・入場料：無料、利用対象は幼児～小学生（保護者同伴）
- ・開館時間：9時～17時（7～8月は18時まで）
- ・休場日：毎月第4曜日（但し、祝祭日の場合は祝祭日の翌日）
年末年始（12月30日から翌年1月3日）



ちっくる屋内



ちっくる(手前)とキュービックコネクション(奥)

② 南幌町子ども室内遊戯施設はれっぱ

「南幌町子ども室内遊戯施設はれっぱ（以下「はれっぱ」とする）」は、有料の遊戯エリア「きやべっちパーク」と無料の休憩エリア「MINAすまいるゾーン」の2つのエリアからなる交流拠点施設で、令和5(2023)年5月にオープンした。施設は北海道産カラマツ集成材を使用した木造平屋建てで、延床面積は約1,000m²である。

有料ゾーンの「きやべっちパーク」内の「アクティブゾーン」は遊具専門企業の「ボーネルンド」が、「木育ゾーン」は「東京おもちゃ美術館」がそれぞれ監修している。

無料ゾーンは、ドトールコーヒー南幌店が出店し、電源・USBポート・Wi-Fi完備の休憩スペースや授乳室・オムツ替えスペース・ベビーケアブースからなり、絵本販売コーナー「はれっぱえほん館」が令和6(2024)年12月にオープンした。

・利用料金：1歳～中学生まで 300円（南幌町民は100円）

0歳児と付き添いの方は無料。

高校生以上は、無料（子どもの付き添いのみ入場可能）

3ヶ月フリーパス：町外 3,000円、町民 1,000円

・営業時間：10時～18時

・休館日：毎月第3月曜日、年末年始（12月30日～1月3日）



③ 屋内交流・遊戯施設ちゃいるも

「屋内交流・遊戯施設ちゃいるも（以下「ちゃいるも」とする）」は、「道の駅るもい」に令和4年4月にオープンし、有料の遊戯広場と無料の交流・休憩スペースからなり、施設には留萌のお土産が買える「お勝手屋 萌」とジェラートや固すぎるプリンなどお菓子を販売している「ルモカフェ」が併設されている。施設の延床面積は784m²である。

有料の遊戯広場は、アクティブゾーンとクリエイティブゾーンの2つのゾーンで構成され、アクティブゾーンには複合遊具や木製バンク、ボルダリングウォールなどが設置されている。クリエイティブゾーンには、発泡ブロックやマグネットブロックなど、創造性を刺激する遊具が設置されている。利用対象は小学生以下で、保護者の付き添いが必要である。

・利用料金：小学生以下 100円（令和7(2025)年4月から留萌市民は無料）

　　0歳児と付き添いの方は無料。

・営業時間：10時～16時

　　施設自体は9時～18時（5月～9月は19時）まで

・休館日：年中無休（12月31日～1月5日は休館）



アクティブゾーン



クリエイティブゾーン

(2) 類似施設の利用状況

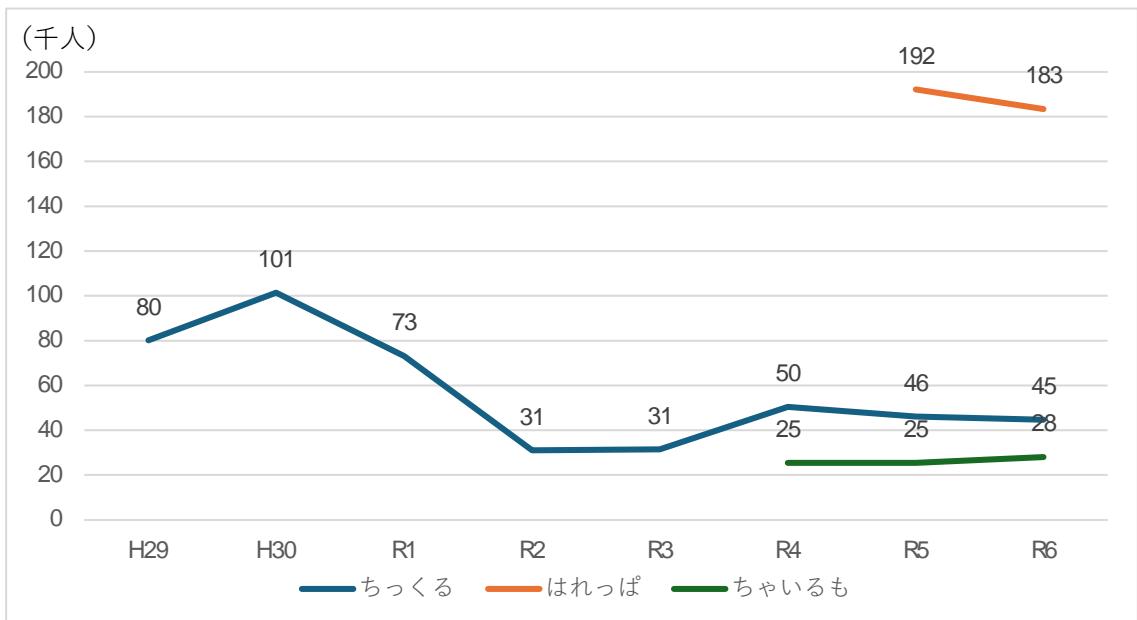
ちっくるは開業2年目の平成30年度に10万人を超える利用があったが、コロナ過で利用が減少、その後利用は回復しているが年間4～5万人の利用となっている。

はれっぱは開業初年の令和5年度に19万人、令和6年度も18万人と利用が多い。周辺の札幌市や江別市、北広島市、恵庭市、千歳市などの道央都市圏からの利用も多いことが想定される。

ちゃいるもは、令和4年度の開業後2.5～2.8万人の利用で推移している。

図表 類似施設の利用状況

	H29	H30	R1	R2	R3	R4	R5	R6
ちっくる	80,131	101,381	73,177	31,006	31,461	50,356	46,179	44,638
はれっぱ							192,087	183,335
ちゃいるも						25,407	25,453	28,032

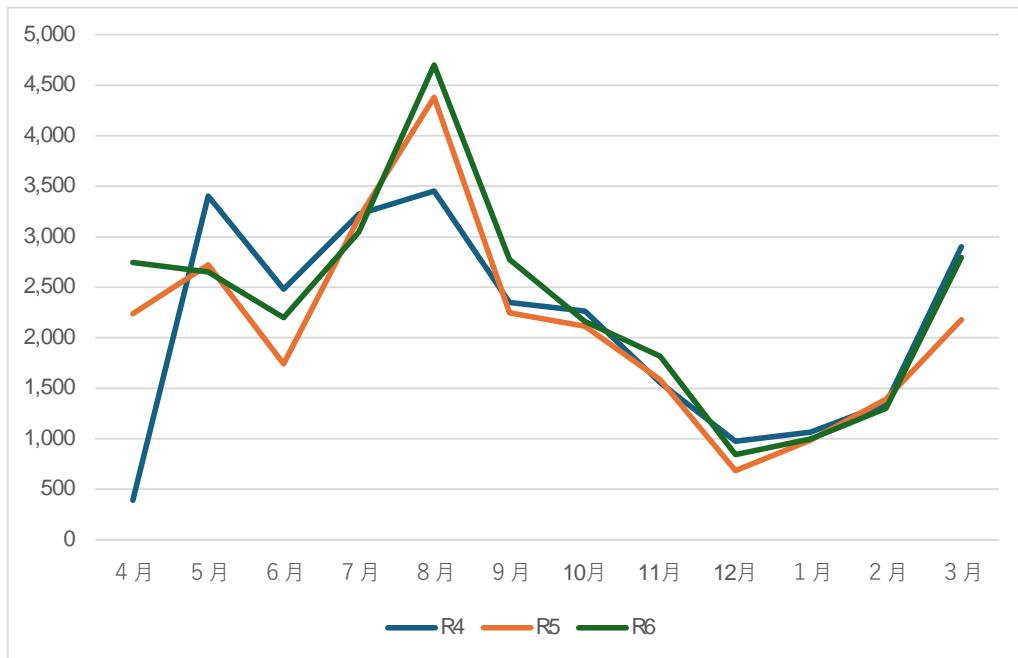


ちやいるもの月別利用状況を見ると、4月～9月の利用が多く、ピークは夏休みのある8月となっており、12月～2月は利用が少ない。

図表 ちやいるもの月別利用状況

	R4		R5		R6	
	人数	構成比	人数	構成比	人数	構成比
4月	390	1.5%	2,238	8.8%	2,744	9.8%
5月	3,401	13.4%	2,720	10.7%	2,650	9.5%
6月	2,480	9.8%	1,741	6.8%	2,199	7.8%
7月	3,222	12.7%	3,186	12.5%	3,045	10.9%
8月	3,452	13.6%	4,381	17.2%	4,700	16.8%
9月	2,350	9.2%	2,245	8.8%	2,775	9.9%
10月	2,265	8.9%	2,115	8.3%	2,162	7.7%
11月	1,557	6.1%	1,586	6.2%	1,817	6.5%
12月	975	3.8%	685	2.7%	844	3.0%
1月	1,065	4.2%	988	3.9%	1,000	3.6%
2月	1,349	5.3%	1,391	5.5%	1,300	4.6%
3月	2,901	11.4%	2,177	8.6%	2,796	10.0%
合計	25,407	100.0%	25,453	100.0%	28,032	100.0%

※令和4年4月分は、4月29日からの入込数



(3) 類似施設周辺の圏域人口

類似施設周辺と新嵐山及び芽室市街地の距離圏域別人口を整理した。

「ちっくる」は10km圏で深川市と滝川市の一部が含まれ、距離圏が伸びるに応じて周辺圏域人口も増加している。令和2(2020)年における20km圏人口は約3万7千人であり、うち15歳未満は約3千人で、15歳未満人口の割合は8.1%となっている。

「はれっぱ」は20km圏で江別市や北広島市、恵庭市、札幌市の南東部を含み、周辺圏域人口が大きく増加する。30km圏では札幌市の大半と千歳市も含まれ、200万人を超える。令和2(2020)年における20km圏人口は約69万2千人であり、うち15歳未満は約7万8千人で、15歳未満人口の割合は11.3%となっている。

「ちゃいるも」は5km圏人口は、類似施設の中では最も多いが、20km圏でも小平町と増毛町が含まれる程度で距離圏が伸びても周辺圏域人口はあまり増加せず、留萌市を中心とした人口となっている。令和2(2020)年における20km圏人口は約3万7千人であり、うち15歳未満は約2千人で、15歳未満人口の割合は8.6%となっている。

「新嵐山」は、5km圏・10km圏人口は類似施設と比較すると最も少なく、一桁少ない人口規模となっている。20km圏で芽室町中心部及び帯広市の西部を含み、はれっぱに次ぐ人口規模となる。令和2(2020)年における20km圏人口は約15万1千人であり、うち15歳未満は約1万8千人で15歳未満人口の割合は、11.8%となっている。

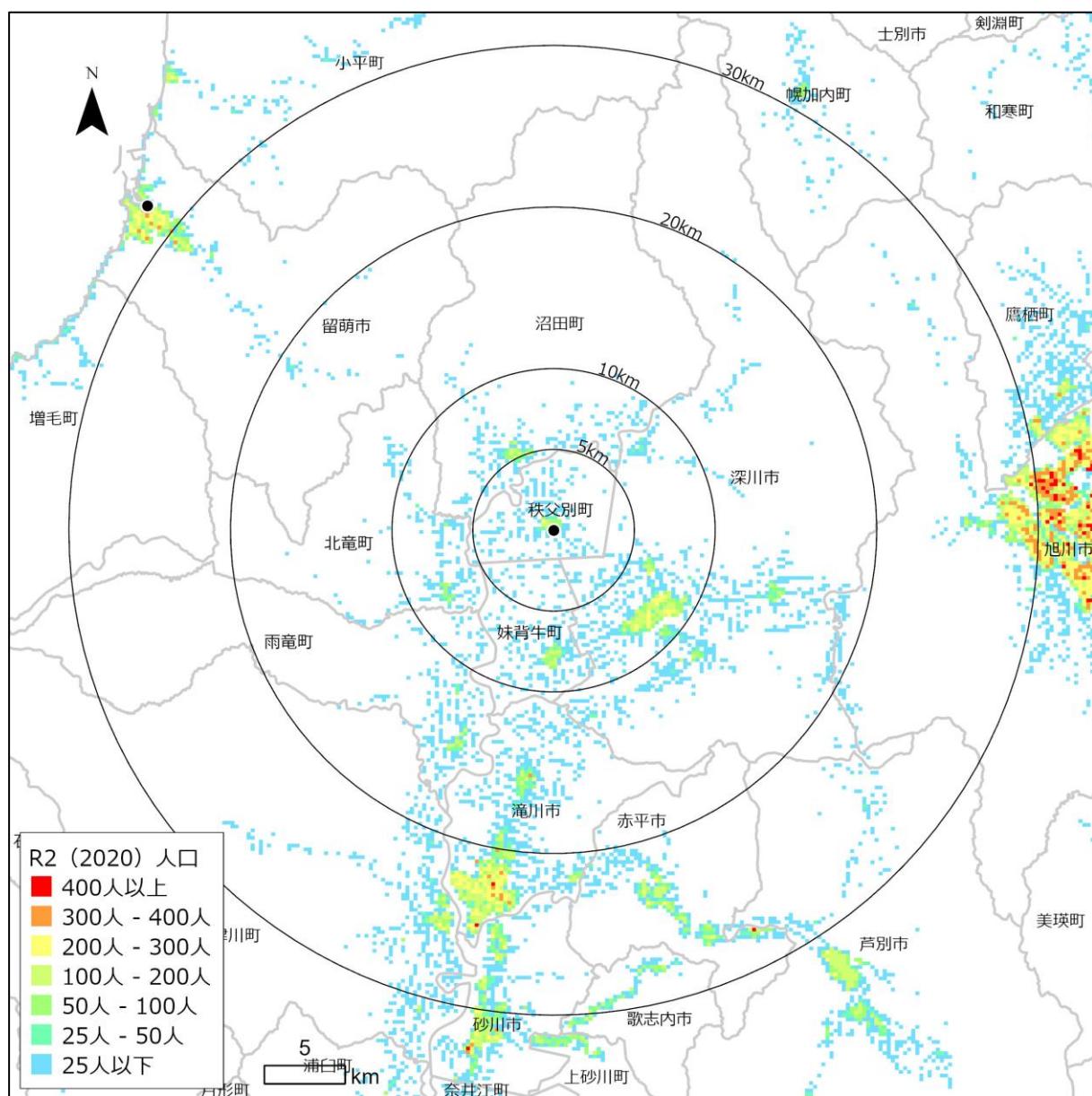
「芽室市街地」は、5km圏で芽室市街地をカバーし、10km圏で帯広市西部、20km圏では音更町・幕別町の主要市街地を含み、新嵐山より10万人ほど多い。一方30km圏では新嵐山と大きな差は無くなる。令和2(2020)年における20km圏人口は約25万4千人であり、うち15歳未満は約3万人で、15歳未満人口の割合は、12.0%となっている。

図表 周辺圏域人口の比較

		ちっくる	はれっぱ	ちゃいるも	新嵐山	芽室市街地
総人口	5 km圏	3,255	7,083	19,753	874	15,334
	10km圏	25,654	46,090	22,184	4,461	67,667
	20km圏	37,131	691,720	26,057	150,771	253,614
	30km圏	129,034	2,185,906	30,811	263,854	277,039
15歳未満	5 km圏	302	689	1,697	135	2,087
	10km圏	2,247	4,882	1,925	578	7,705
	20km圏	3,009	78,248	2,240	17,862	30,318
	30km圏	11,817	237,140	2,644	31,639	32,962
15歳未満 人口比率	5 km圏	9.3%	9.7%	8.6%	15.5%	13.6%
	10km圏	8.8%	10.6%	8.7%	13.0%	11.4%
	20km圏	8.1%	11.3%	8.6%	11.8%	12.0%
	30km圏	9.2%	10.8%	8.6%	12.0%	11.9%

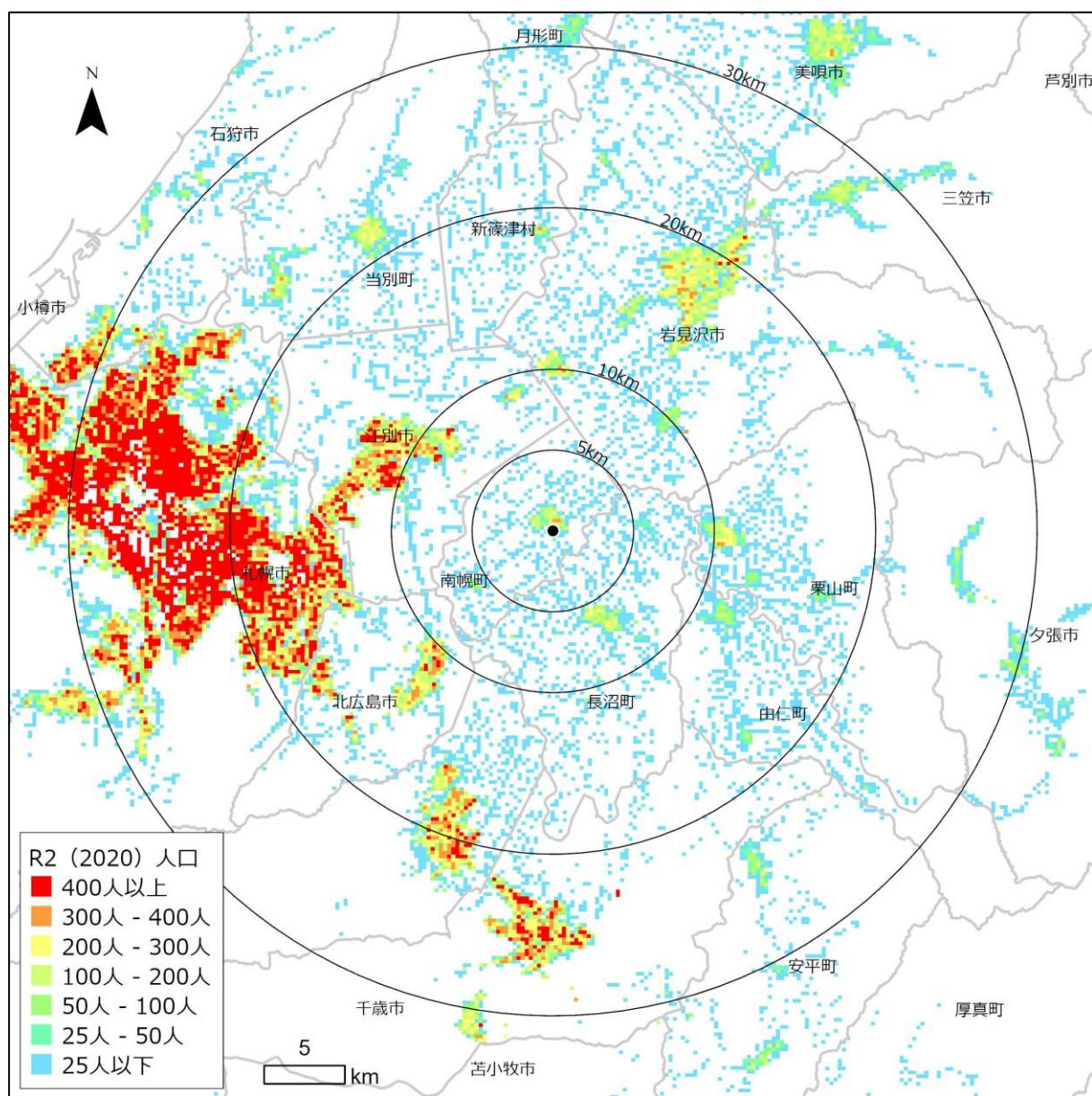
図表 ちっくる周辺圏域人口

	令和2(2020)年			令和12(2030)年（推計値）			令和22(2040)年（推計値）		
	総人口	15歳未満人口	構成比	総人口	15歳未満人口	構成比	総人口	15歳未満人口	構成比
5km圏	3,255	302	9.3%	2,591	231	8.9%	2,058	193	9.4%
10km圏	25,654	2,247	8.8%	20,538	1,511	7.4%	16,292	1,124	6.9%
20km圏	37,131	3,009	8.1%	29,281	1,969	6.7%	22,801	1,476	6.5%
30km圏	129,034	11,817	9.2%	107,595	8,106	7.5%	89,053	6,385	7.2%



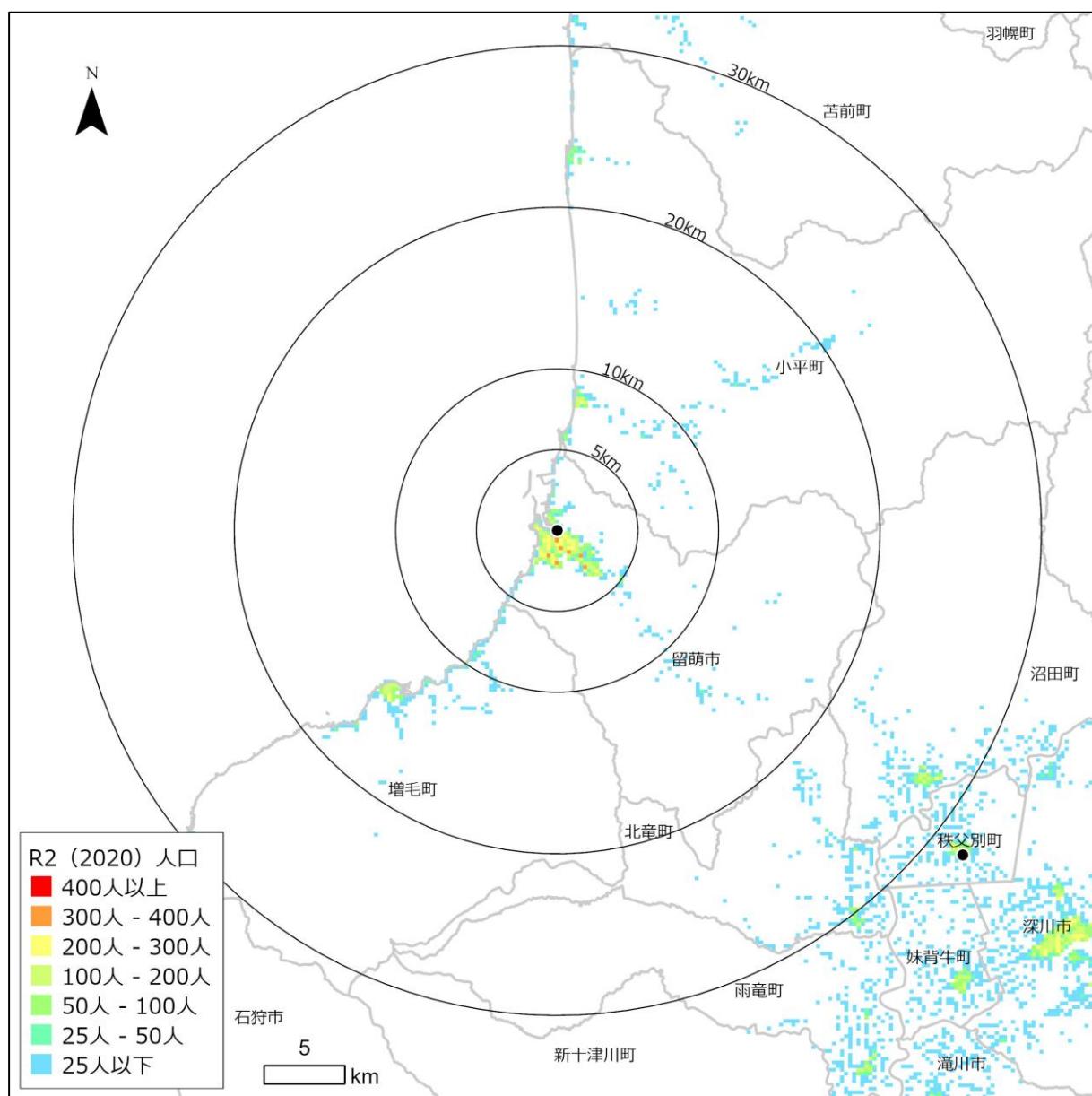
図表 はれっぱ周辺圏域人口

	令和2(2020)年			令和12(2030)年（推計値）			令和22(2040)年（推計値）		
	総人口	15歳未満人口	構成比	総人口	15歳未満人口	構成比	総人口	15歳未満人口	構成比
5km圏	7,083	689	9.7%	6,728	708	10.5%	5,446	416	7.6%
10km圏	46,090	4,882	10.6%	42,497	3,791	8.9%	36,982	3,093	8.4%
20km圏	691,720	78,248	11.3%	653,126	60,934	9.3%	597,526	52,938	8.9%
30km圏	2,185,906	237,140	10.8%	2,132,358	201,225	9.4%	2,022,196	182,929	9.0%



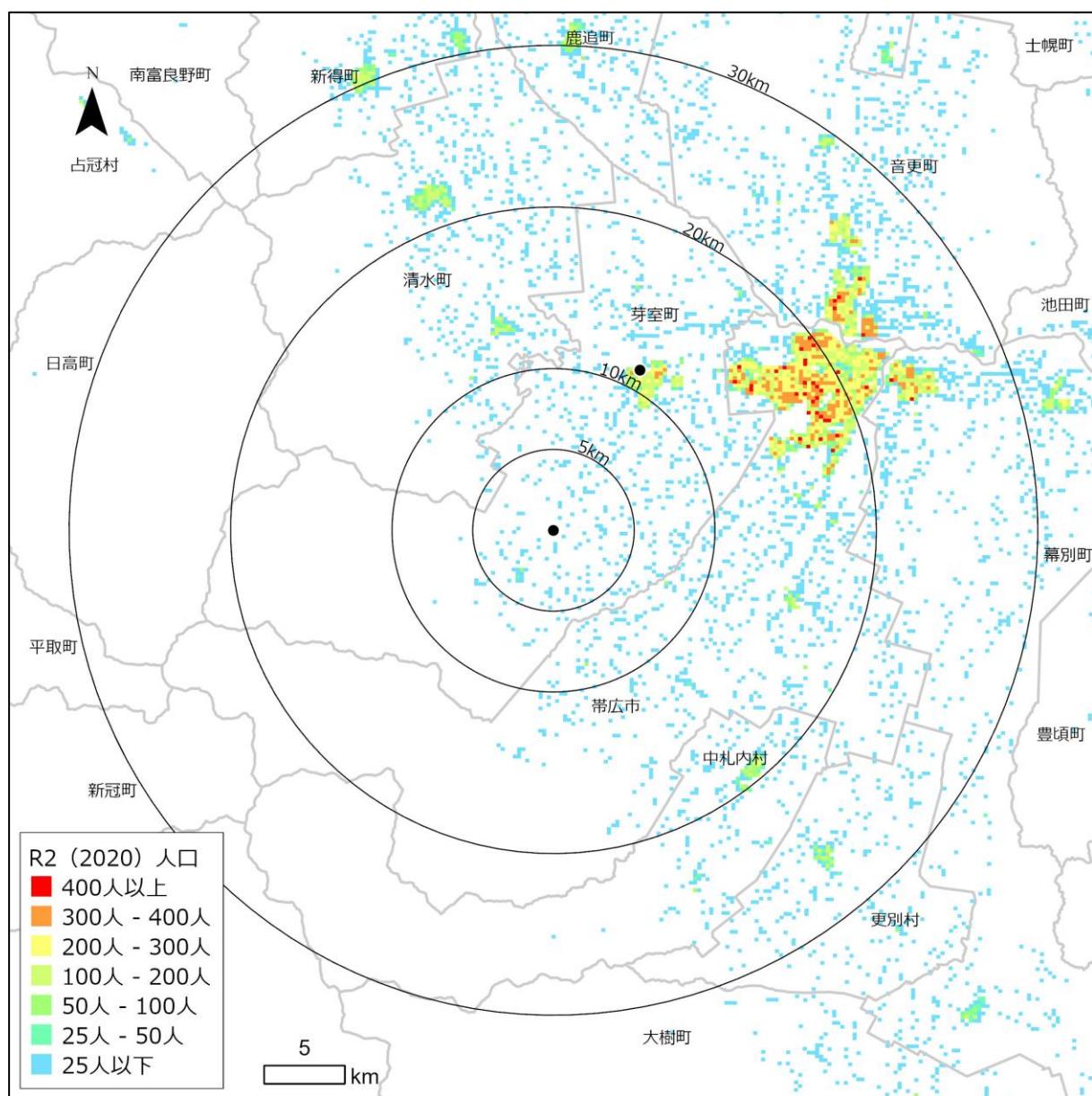
図表 ちやいるも周辺圏域人口

	令和2(2020)年			令和12(2030)年(推計値)			令和22(2040)年(推計値)		
	総人口	15歳未満人口	構成比	総人口	15歳未満人口	構成比	総人口	15歳未満人口	構成比
5km圏	19,753	1,697	8.6%	15,491	911	5.9%	11,964	619	5.2%
10km圏	22,184	1,925	8.7%	17,372	1,057	6.1%	13,373	726	5.4%
20km圏	26,057	2,240	8.6%	20,366	1,248	6.1%	15,665	863	5.5%
30km圏	30,811	2,644	8.6%	24,195	1,565	6.5%	18,670	1,096	5.9%



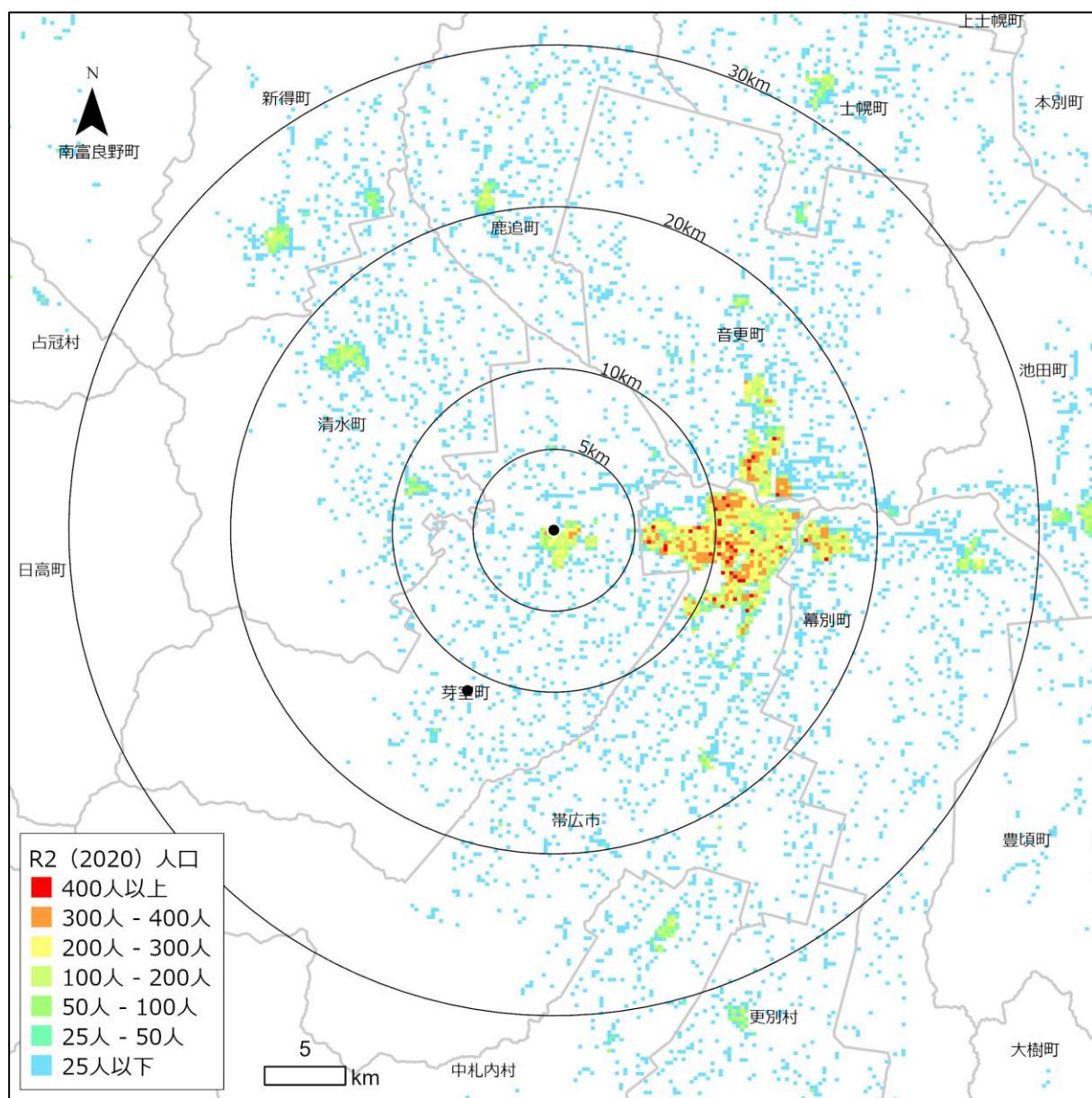
図表 新嵐山周辺圏域人口

	令和2(2020)年			令和12(2030)年(推計値)			令和22(2040)年(推計値)		
	総人口	15歳未満人口	構成比	総人口	15歳未満人口	構成比	総人口	15歳未満人口	構成比
5km圏	874	135	15.5%	785	83	10.6%	691	72	10.4%
10km圏	4,461	578	13.0%	4,110	387	9.4%	3,708	354	9.5%
20km圏	150,771	17,862	11.8%	141,267	13,704	9.7%	130,286	12,416	9.5%
30km圏	263,854	31,639	12.0%	245,391	23,812	9.7%	226,115	21,046	9.3%



図表 芽室市街地周辺圏域人口

	令和2(2020)年		令和12(2030)年（推計値）			令和22(2040)年（推計値）			
	総人口	15歳未満人口	構成比	総人口	15歳未満人口	構成比	総人口	15歳未満人口	構成比
5km圏	15,334	2,087	13.6%	14,216	1,505	10.6%	13,123	1,322	10.1%
10km圏	67,667	7,705	11.4%	62,954	5,660	9.0%	57,210	5,209	9.1%
20km圏	253,614	30,318	12.0%	235,992	22,837	9.7%	217,646	20,168	9.3%
30km圏	277,039	32,962	11.9%	256,744	24,753	9.6%	235,684	21,854	9.3%



(4) 想定利用人数の検討

類似施設における利用人数と周辺圏域人口の関係を見ると、強い相関関係がみられる。

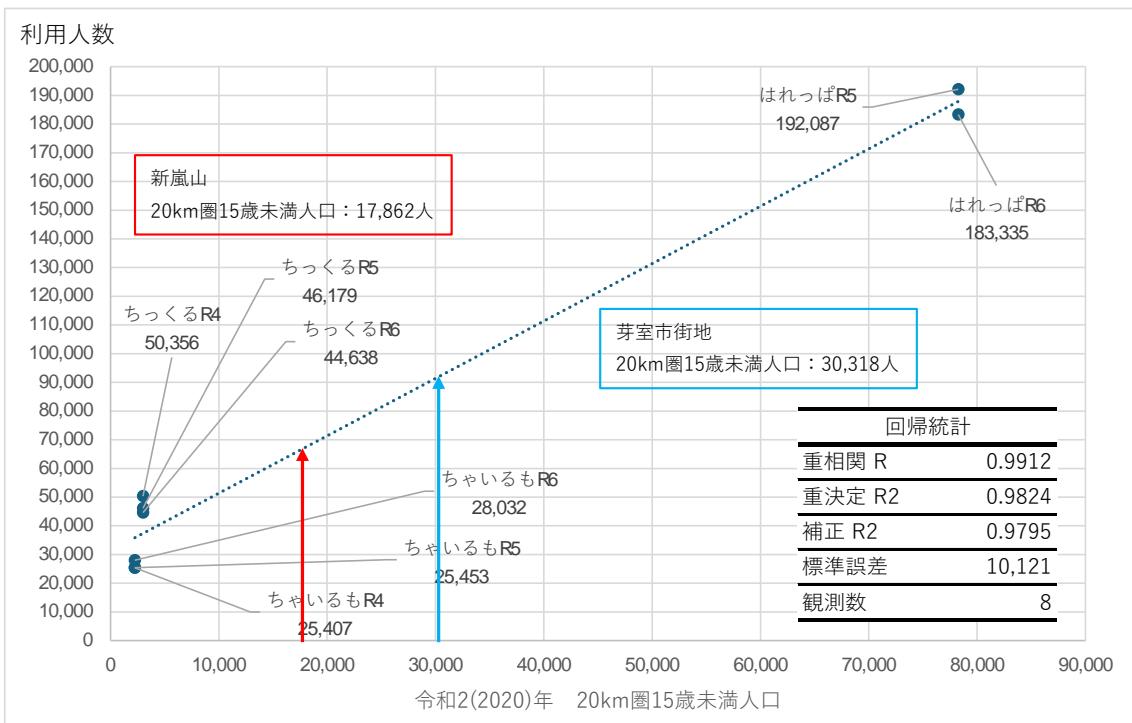
20km圏域における15歳未満人口と施設の利用人数（コロナ過の影響が小さくなつたR4以降）について回帰分析を行ったところ、重決定係数が0.9824と強い相関関係が見られるが、標準誤差が10,121とやや大きい値となっている。

この関係性から20km圏の15歳未満人口をベースに考えると、「新嵐山」は6～7万人、「芽室市街地」は9～10万人程度の利用が想定される。

図表 距離別15歳未満人口と利用人数

		ちっくる	はれっぱ	ちゃいるも	新嵐山	芽室市街地
15歳未満 人口 R2(2020)	5 km圏	302	689	1,697	135	2,087
	10km圏	2,247	4,882	1,925	578	7,705
	20km圏	3,009	78,248	2,240	17,862	30,318
	30km圏	11,817	237,140	2,644	31,639	32,962
利用人数	R4(2022)	50,356		25,407		
	R5(2023)	46,179	192,087	25,453		
	R6(2024)	44,638	183,335	28,032		

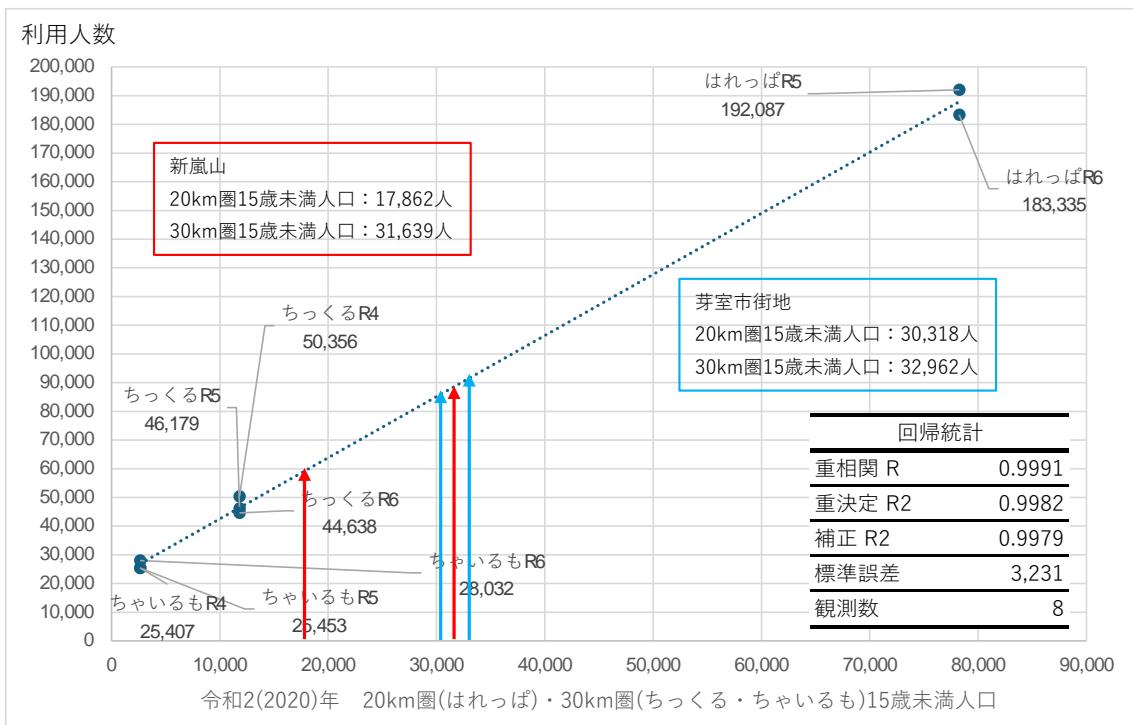
図表 施設利用人数と20km圏15歳未満人口



前述の施設利用人数と20km圏15歳未満人口との相関関係において標準誤差が大きくなっている要因としては、「はれっぱ」の周辺地域における人口の集積度合いが高く、他2施設の圏域人口と大きく違うことや都市間移動の道路状況（車による移動のしやすさ）などが考えられる。このため、「ちっくる」と「ちゃいるも」については30km圏の15歳未満人口を採用して回帰分析を行ったところ、重決定係数が0.9982と相関が強くなり、標準誤差は3,231と減少した。

「新嵐山」は20km圏15歳未満人口でみると30km圏15歳未満人口でみるとかで大きく利用想定に幅が出て6～9万人程度と想定される。一方「芽室市街地」では20km圏15歳未満人口と30km圏15歳未満人口で導かれる利用人数の差は小さく、9～10万人程度と想定される。

図表 施設利用人数と15歳未満人口



1. 重相関 R (Multiple Correlation Coefficient)

YとXの直線的な関係の強さを示します。

値の範囲: -1 ~ 1 (±1に近いほど強い相関)

絶対値が大きいほど強い相関を意味します。

2. 重決定係数 R² (Coefficient of Determination)

XがYの変動をどれだけ説明できるかを示します。

値の範囲: 0 ~ 1 (1に近いほど説明力が高い)

たとえば $R^2 = 0.8$ なら、「XがYの80%の変動を説明している」という意味です。

3. 補正 R² (Adjusted R²)

単回帰では、R²と補正R²はほぼ同じ値になります。

補正R²は、説明変数が増えるときに使う調整値なので、単回帰ではありません。

4. 標準誤差 (Standard Error of the Estimate)

回帰直線からの予測誤差の平均的な大きさを示します。

値が小さいほど、予測が正確ということになります。

単位は目的変数と同じです。R²と併せて見ると効果的です。

(5) 屋内遊戯施設の導入検討

帯広市においてはフレスボスズラン（イトーヨーカドー帯広店跡）に帯広市子ども室内遊戯施設「すずらん あそびっこふあーむ」が令和7年7月4日にオープンしたほか、音更町においては、十勝川温泉近くの十勝が丘公園内に屋内遊戯施設整備に向けて、令和7年度中に事業プロポーザル方式により事業者を決定するスケジュールで進めており、芽室町における屋内遊戯施設との競合も想定される。

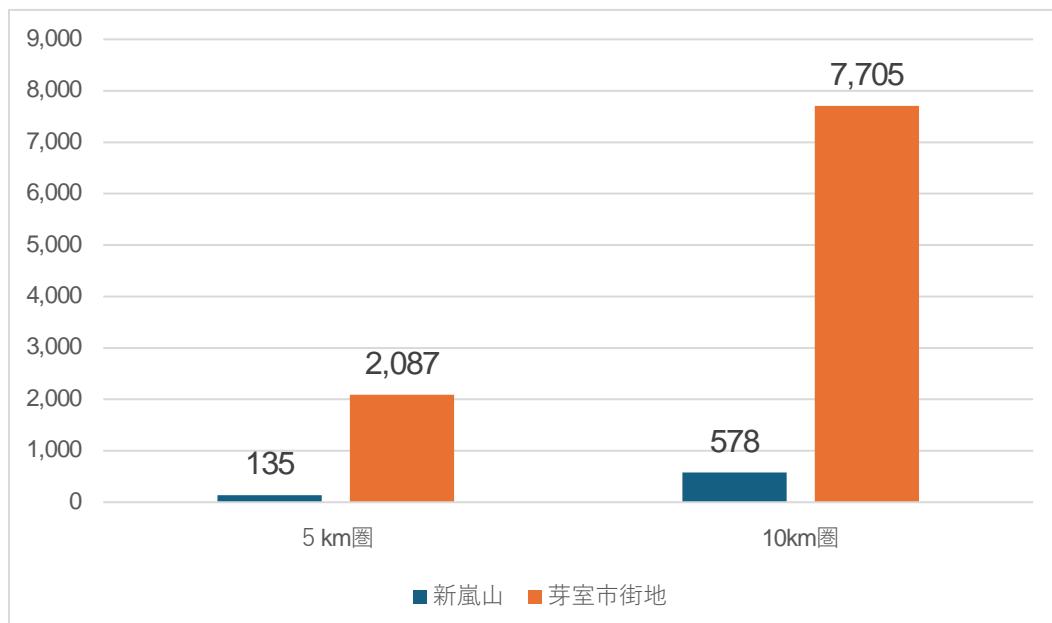
屋内遊戯施設は、基本的に保護者が子どもを連れていくという施設の性格を考えると、整備内容の差別化を大きく図らない限りは、移動に時間をかけて遠くの施設を利用するより、近隣の施設を利用することになると考えられる。

競合施設は帯広市周辺の人口集積度が高い地域の周辺に立地することとなり、新嵐山であっても芽室市街地であっても、競合することは間違いないが、より距離が遠い新嵐山においては、集客は苦戦することが予想される。

また町民の利用のしやすさという観点から、新嵐山と芽室市街地で5km圏、10km圏の15歳未満人口を比較すると、その差は非常に大きく、町民や十勝の中核市である帯広市や近隣の町、西十勝等の子育て世代は芽室市街地の方が圧倒的に利用しやすく、かつ、高速道路ICや国道、JRなどの交通の結節点という立地により十勝管外からの誘客にもつながると考えられる。

以上を踏まえ、屋内遊戯施設の導入について検討した結果、新嵐山スカイパークでは導入を見送り、それをふまえた新嵐山スカイパーク再整備の検討を進める。

図表 新嵐山と芽室市街地の距離圏別15歳未満人口の比較



III – 2 拠点施設における導入機能の整理

グランドデザインでは、拠点施設（図中では⑥）には屋内遊戯施設、飲食、売店、が位置づけられていたが、今回の検討においては屋内遊戯施設の導入は見送ることとした。

飲食（レストラン）や売店については、スキー場機能としても必要であることから、⑤センターハウス棟にレストランや売店を併設することとして、スキー場のセンターハウスを新拠点施設とする。

新嵐山スカイパークグランドデザイン 配置図（再掲）



IV 新嵐山スカイパーク全体再整備計画

IV-1 全体再整備の基本的考え方

基本構想で定めた基本方針（基本的な考え方、利活用ゾーンの考え方、施設整備の考え方）、機能ごとの整備方針に基づき、グランドデザインにおける機能について検討した結果をふまえ、全体再整備計画をまとめた。

なお、全体再整備計画では次の視点をもって取り組む。

- ・スキー場及びキャンプ場の利便性を高める
- ・整備費用を抑えるため、活用できる施設は活用するが、新たに施設を整備する場合は、既存施設の統廃合を行い、建物の面積を圧縮する
- ・都市公園への編入をふまえ、新嵐山スカイパークの自然環境の保護や景観に配慮する

グランドデザインにおける機能についての検討結果を次ページで示す。

グランドデザインにおける機能についての検討結果

機能 (グランドデザイン)	現状と課題(グランドデザイン・基本構想)	整備方針(基本構想)	検討結果(基本計画)
宿泊	<ul style="list-style-type: none"> ・建物や設備の老朽化が進み、再度利用するためには大規模な修繕やリニューアル工事が必要になる ・施設規模が大きく、修繕費・改修費及び維持管理や人員等の運営コストが必要になるが、これまでの運営においても最大の不採算部門であり、経営の面でも大きな課題がある 	<ul style="list-style-type: none"> ・国民宿舎新嵐山荘は、建物や設備の老朽化が進み、施設全体の再開は困難 ・これまでの営業において宿泊部門は最大の不採算部門となっており、経営面を考慮しても、大規模改修やリニューアル工事を行ったうえでも再開は困難なことから、宿泊機能は「キャンプ」で検討するとともに、民間活用ゾーンでの民間活力の活用を検討する ・景観や防犯、利用者の安全上からも、国民宿舎新嵐山荘については、施設の解体撤去を想定して進める 	<ul style="list-style-type: none"> ・国民宿舎新嵐山荘は解体する ・宿舎やホテルといった大型の宿泊施設は整備しない ・キャンプエリアで簡易施設(トレーラーハウス等)により宿泊機能を整備する
キャンプ場	<ul style="list-style-type: none"> ・ニーズの高いオートサイトやコテージは現在の施設では対応できていない ・オートキャンプ場は平成28年台風10号により被災し、使用ができない状態となっている 	<ul style="list-style-type: none"> ・旧オートキャンプ場のオートサイト機能の移転を検討するとともに、コテージの整備を検討する 	<ul style="list-style-type: none"> ・キャンプエリアを整備する(フリーサイト、オートサイト等) ・簡易施設(トレーラーハウス等)を整備し、大型のコテージは整備しない
温浴施設	<ul style="list-style-type: none"> ・大規模停電時など防災の観点からの再開の要望があるが、施設・設備の老朽化により、再開する場合は大規模修繕が必要になる ・温泉施設ではないため、これまででも温泉の要望等があつたが、過去の調査において掘削が難しいことがわかつており、導入は難しい状況となっている 	<ul style="list-style-type: none"> ・温泉の掘削が難しいことや、大浴場の維持管理コストを含め、町での設置、運営は難しく、整備は困難 ・民間活用ゾーン等において、幅広く民間事業者から利活用を募る際に温浴施設設置の可能性も含め提案を募集する 	<ul style="list-style-type: none"> ・町では温浴施設は整備しない
飲食	<ul style="list-style-type: none"> ・町民の皆さんやスキーパークの皆さん、地域や町内会の行事の場としても利用いただいているが、コロナ禍以降、団体客の減少など利用が減少していた ・令和6年度にムロスキー場を再開した際は、町内事業者のプレハブやキッチンカーの出店などにより飲食の提供を行ってきたが、団体利用への対応や夏季(スキー場クローズ時)はこれらの対応が困難 	<ul style="list-style-type: none"> ・飲食については、「集客機能」とあわせて検討する 	<ul style="list-style-type: none"> ・新ロッジに飲食・休憩エリア(厨房併設)を設置するが、町(指定管理業務含む)では飲食(レストラン)は運営しない ・春～秋は町内外の事業者や地域行事等での飲食・休憩エリアの利用(期間限定レストランや地域行事でのケータリングでの厨房利用)を想定 ・冬季は指定管理事業者を中心にスキー場利用者向けの飲食提供(指定管理事業者が町内事業者と連携し、自主事業で運営する想定)
売店	<ul style="list-style-type: none"> ・国民宿舎新嵐山荘内の売店は、規模も小さく、町の特産品PRの場としての機能は限定的なものとなっていた ・町内外からの利用者に対し、町の特産品をPRするためには、一定の規模が必要であるが、既存の町内の施設との役割の整理や、運営主体の確保が必要 	<ul style="list-style-type: none"> ・売店については、「集客機能」とあわせて検討する 	<ul style="list-style-type: none"> ・飲食と同様に町(指定管理業務含む)では売店は運営しない ・特産品 PR は既存の町内の施設(まちの駅、民間施設(愛菜屋等))で実施していることから、新嵐山スカイパークについては、指定管理事業者を中心に利用者向けの商品(軽食やキャンプ用品)を中心に取り扱う想定

機能 (グランドデザイン)	現状と課題(グランドデザイン・基本構想)	整備方針(基本構想)	検討結果(基本計画)
スキー場	<ul style="list-style-type: none"> 町内の小中学校や十勝管内の高校のスキー授業などでも利用されており、町内外の子どもからお年寄りまでさまざまな年代の方に冬のスポーツの場や教育の場として利用されているが、施設全体が老朽化している リフトは第1リフト、第2リフトがあるが、老朽化により第2リフトは稼働できず、第1リフトと初心者向けのコースとの距離などに対する改善の要望があるとともに、第1リフトも老朽化が進んでおり、大規模修繕や更新(架け替え)の検討が必要になる ロッジは、老朽化により使用することができず、トイレや飲食、着替えの場所の確保が必要 	<ul style="list-style-type: none"> スキー場は、社会体育施設に類する機能として今後も継続する 設備や機械など、老朽化が進んでいるが、いずれも安全・安心にスキー場を利用いただくために必要な設備、機械・備品であり、メーカー等による点検や修繕といった適切な維持管理を行う リフトは、中長期的な計画に基づく修繕を行うが、国の制度等を活用し、修繕費用と更新費用のコスト比較を行い、リフトの統合(更新)による維持管理、運営コストの軽減、利用者の利便性の向上を図る手法を検討するほか、夏季の運行についても検討する ロッジは、老朽化が進んでいることから、現在の施設は解体撤去を想定して進めるが、スキー場の運営や利用者に必要な機能であるため、新たなロッジ機能の設置について検討する 有利な国の補助制度等の活用が可能で、運営における喫緊の課題解決と利用者の利便性向上につながる事業は、基本計画に反映が可能で、早期に実施することでメリットが大きくなるものについては、財源確保を条件に実施する 	<ul style="list-style-type: none"> スキー場は、社会体育施設に類する機能として今後も継続する リフトは修繕費用と更新費用の比較及びAコース、Cコースの利用者の利便性から、3本のリフト(第1リフト A線・B線、第2リフト)を1本に統合する(各コースの利用者が利用しやすく、かつ、統合による混雑緩和のため自動ゲートを効果的に活用する) 修繕費用…10年間で約6億円(財源なし) 更新費用…約4億5,000万円(財源あり) 旧管理棟付近に新ロッジ(センターハウス)を整備する(整備の際はフォアレストハウス、旧管理棟、D型ハウス等を解体、機能統合し、面積の圧縮、統合による維持管理の効率化を目指す) ナイター施設については、当分の間休止する(再開する場合はLED化などの更新とともに、ナイター営業に係る指定管理委託料(人件費)追加の対応が必要) リフト更新や除雪機・圧雪車の老朽化対策等は都市公園に編入することで活用可能な国の制度や企業版ふるさと納税などにより財源確保に取り組む
フィールドを活用したサービス(ドッグラン、パークゴルフ場等)	<ul style="list-style-type: none"> 再開の要望が多い施設だが、老朽化が進むとともに、規模や場所の変更の要望が多い 野草や野鳥など自然観察を楽しむ方も多く、自然環境の維持を望む声も多い マウンテンバイクなどのアクティビティの場としての利用希望があり、これらの利用についても検討が必要 駐車場は建物(国民宿舎新嵐山荘)が間に配置され、駐車場全体をイベント会場とするなど一体としての利用はできない構造となっている 第3駐車場は、「新嵐山スカイパークのグランドデザイン(全体的な構想)」においては、民間活用ゾーンとして、旧オートキャンプ場とともに、民間事業者から幅広い提案を受けることとしている 	<ul style="list-style-type: none"> パークゴルフ場やドッグランについては、それぞれ費用や配置、面積等を検討し、整備について検討する 屋外大型遊具の設置やサイクルツーリズムなどによる通年利用、アクティビティを検討する 上記の検討にあたっては、国の制度との連携や民間事業者を募るなどの手法を検討する 駐車場は、国民宿舎新嵐山荘の解体撤去後は第1駐車場と第2駐車場を一体で利用することが可能になり、イベント開催時における駐車場の利活用がさらに可能になるものと考えられるが、面積も広く、すべてを舗装化することは経費の面からも困難 	<ul style="list-style-type: none"> 新嵐山スカイパークのフィールド(エリア)を都市公園として編入することから、都市公園の機能(都市公園における公園施設)として以下の取組を行う ドッグラン、アスレチックなど新嵐山スカイパークの景観と調和した整備を行う(国の制度を活用) マウンテンバイク等のアクティビティは指定管理事業者の自主事業や民間事業者の活用を募集し、公園における民間活力活用を進める 駐車場は老朽化した箇所の補修等を行い、全面舗装は行わない パークゴルフ場は整備費とともに管理(週2~3回の草刈)の負担が大きく、現状の指定管理の想定では対応は困難のため整備は行わない 町内外からのイベント活用は今後も継続して対応する
展望台	<ul style="list-style-type: none"> 展望台からの風景が芽室遺産に認定されるとともに、芽室町観光ビジョンにおいては、観光シンボルにも設定される芽室町を代表する景勝地となっており、新嵐山スカイパークが休止中も町内外から多くの来訪者がある 老朽化が進み再整備の要望が多いが、イベント開催時には展望台付近で仮設の飲食店設置やキッチンカーなどの手法で活用されている 展望台までの道路(林道)は道幅も狭く、車のすれ違いが難しい場所も多いため、道路の拡幅等の要望も多いが、林道であることや、事業費の面からも整備が難しい 	<ul style="list-style-type: none"> 再整備の要望が多い施設だが、「スキー場」とおり、リフトの修繕または更新の検討の際に夏季の利用も検討することとしており、夏季の利用の際は展望台付近が乗降場所となることが考えられることから、リフトの検討とあわせて再整備の時期や配置場所等を検討する 展望台は設置から30年以上が経過し老朽化が進んでいることから、リフトの更新や大規模改修の方針と連動した再整備を先行して実施する手法についても検討する 	<ul style="list-style-type: none"> リフトを統合し、夏季利用を可能にするとともに、統合後の新リフトの降り場(夏は乗降)を展望台駐車場とし、リフトによる展望台へのアクセスを可能にする 現在の展望台を活かした長寿命化改修を実施する 冬季の展望台からスキー場への動線を設置する リフトの夏季運行を見込み、頂上に滞在する機能を検討する

機能 (グランドデザイン)	現状と課題(グランドデザイン・基本構想)	整備方針(基本構想)	検討結果(基本計画)
集客機能	<ul style="list-style-type: none"> ・通年でさまざまな世代の集い、遊び、憩う場、交流の場として、屋内遊戯施設、飲食、売店を新たな拠点機能として位置づけている ・屋内遊戯施設設置に関するアンケート調査では、町内に屋内遊戯施設の設置を望む声が多くある一方で、新嵐山スカイパークと市街地との距離や冬季の移動に関する意見、送迎バスの要望や、子どもたちの日常の利用などの点から市街地への設置を望む意見もあり、これらを含めて検討する必要がある 	<ul style="list-style-type: none"> ・屋内遊戯施設は、子育て環境の充実や町内外から多くの子育て世帯を呼び込むことができる施設であり、アンケート調査においても町内への設置を希望する声が多いあるが、市街地との距離、冬季の移動、子どもたちの日常の利用の点から、市街地への設置の要望もあり、新嵐山スカイパークの設置については、検討を行う ・飲食、売店については、屋内遊戯施設とともに整備することで通年での集客につなげるものであり、屋内遊戯施設の検討とあわせて設置を検討する 	<ul style="list-style-type: none"> ・芽室町市街地との距離や近隣市町との距離(人口)などから新嵐山スカイパークにおいて屋内遊戯施設を設置することは困難と判断し、整備しないこととする ・飲食、売店についてはそれぞれの項目で記載のとおり、新ロッジで整備するが、運営にあたっては指定管理事業者の自主事業や町内事業者等の民間活力を活用する
町民向けサービス	<ul style="list-style-type: none"> ・他自治体で導入されている住民(町民)を対象としたサービスの要望があり、町民の皆さんに愛着を持って利用いただくことは町内外から多くの誘客につながることから、町民向けサービスの実施に向けた検討が必要になる 	<ul style="list-style-type: none"> ・町民の皆さんの憩いの場、レクリエーションの場、冬のスポーツの場、子どもたちの教育の場として、機能ごとの整備方針に基づき検討を進めるが、多くの町民の皆さんに利用いただき、愛着を持っていただくことは町内外からの多くの誘客につながるものであり、町民の皆さん利用促進の観点からも、町民割(町民価格等)を検討する 	<ul style="list-style-type: none"> ・新嵐山スカイパークの再生にあたり、町民の皆さん利用促進を図る観点から、次の考え方により町民価格を導入する <ul style="list-style-type: none"> ・スキー場についてはリフト利用料の改定とあわせて町民価格を導入するとともに、小学校～高校のスキー授業に係る減免規定を検討(R8 導入想定) ・キャンプ場、簡易施設(トレーラーハウス等)は整備とあわせて町民価格を導入する

IV-2 目標利用人数の設定

これまでの新嵐山スカイパークにおけるキャンプ場やスキー場の利用人数、国民宿舎における日帰り入浴客数、宿泊人数、レストラン利用人数・売上などの既存データを分析し、再整備後の施設ごとの目標利用人数を設定する。

(1) 既存データの整理

① 新嵐山スカイパーク年度別 売上高・利用人数・営業日数（実績）

平成25年度から令和4年度までの10年間の売上高を見ると、全体では13～15億円程度で推移したが、令和2～3年度はコロナ禍の影響により大きく減少したが、令和4年度には回復している。

コロナ前の状況では、宿舎部門が10億円前後、スキー場部門が4億円前後の売上となっている。

キャンプ場部門は、平成28年度までは美生川沿いのめむろ新嵐山オートキャンプ場で営業していたが、平成28年の台風被害によりオートキャンプ場の営業ができなくなり、平成29年度から令和元年度にかけては営業を休止していた。令和2年度からは国民宿舎周辺にキャンプ場を移転して営業を再開した。令和2年度以降は冬期間の営業を開始し、令和3年度からは通年営業として売上を伸ばし、令和4年度は約13百万円の売上があった。

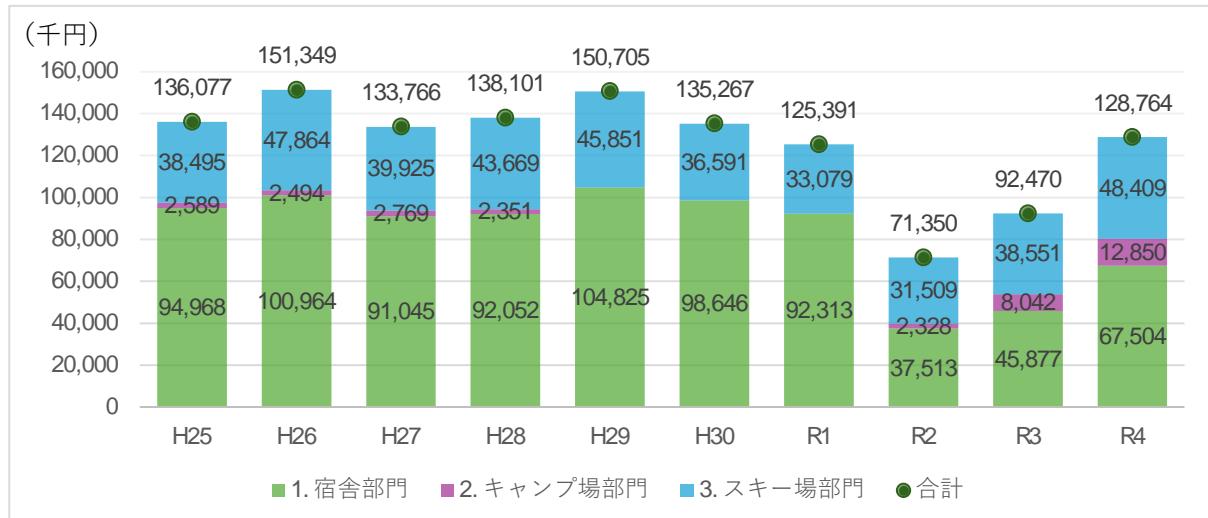
平成25年度から令和4年度までの宿泊人数は、コロナ前の状況では、宿泊人数は5,000～6,000人程度で推移していたが、令和2年度に大きく落ち込んだものの令和4年度では4,000人を超えるまでに回復した。

キャンプ場利用人数は、国民宿舎周辺に移転してからは利用者数が増加し、令和3年度、4年度では4,000人を超える利用があった。

スキー場については、降雪の状況により年度ごとのばらつきがあり、30万人から50万人程度となっているが、令和2年度以降は30万人以下で推移している。

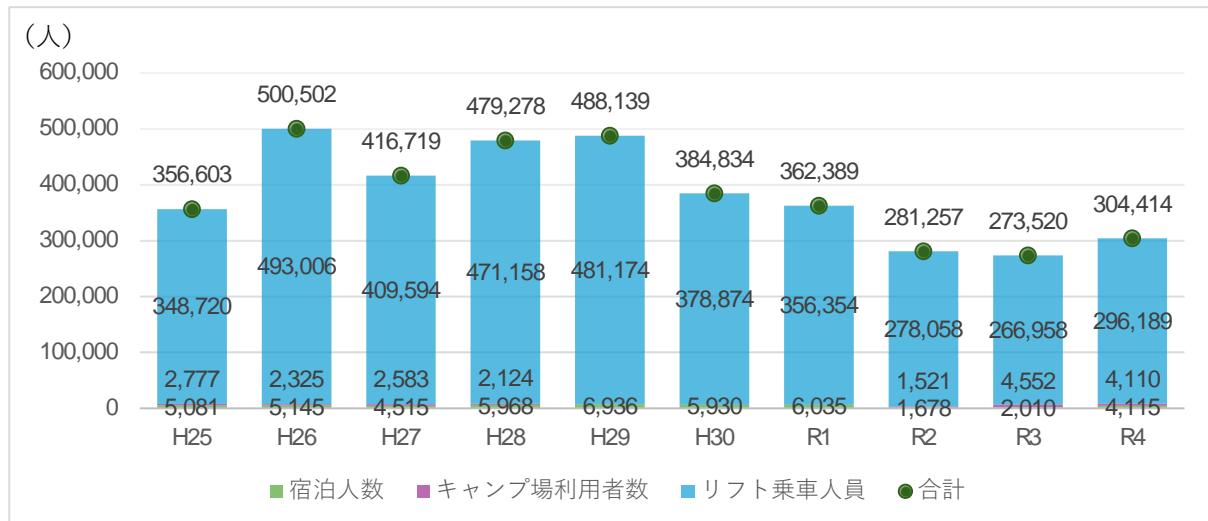
なお、リフト乗降者数については、シーズン券や1日券、4時間券等の購入者が一定回数以上乗車していることや、スキー場単体でなく、宿泊者や入浴、レストラン利用者があわせてスキー場を利用するなど、さまざまな利用方法があることから、スキー場に訪れた実人数を把握することは困難である。

図表 新嵐山スカイパーク 売上高の推移

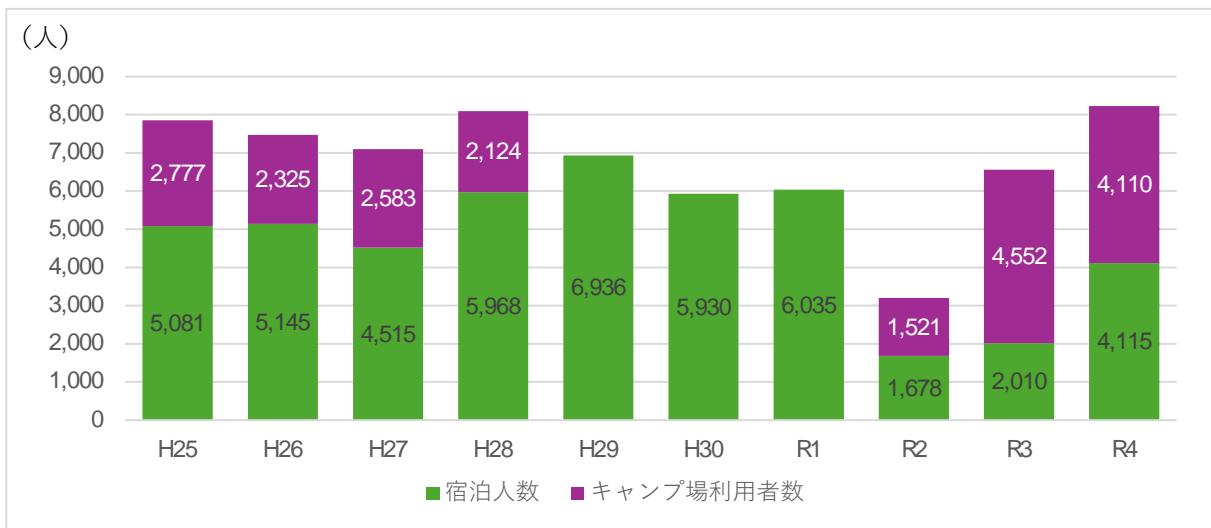


	千円										
	H25	H26	H27	H28	H29	H30	R1	R2	R3	R4	R6
1. 宿舎部門	94,968	100,964	91,045	92,052	104,825	98,646	92,313	37,513	45,877	67,504	—
宿泊	32,911	34,477	30,698	38,194	44,205	40,511	40,861	13,469	10,615	21,818	—
レストラン 計	21,422	23,072	19,692	17,661	19,923	18,906	17,065	14,084	23,732	34,991	—
コロボックル	—	データ不明	—	9,907	11,586	—	—	—	—	—	—
スカイパーク	—	データ不明	—	7,754	8,337	—	—	—	—	—	—
バーベキュー	11,931	12,813	11,416	9,692	10,816	10,111	10,025	2,551	3,939	1,240	—
宴会	19,987	21,982	21,577	19,490	22,703	22,626	19,041	3,234	2,012	1,853	—
売店・自販機	4,440	4,868	4,259	4,342	4,467	3,603	3,092	2,110	3,704	5,094	—
入浴	1,940	1,944	1,722	1,359	1,281	1,605	1,411	1,408	1,369	2,202	—
貸室・その他	2,338	1,808	1,681	1,315	1,430	1,285	817	657	505	305	—
2. キャンプ場部門	2,589	2,494	2,769	2,351	H28台風被害により営業休止	—	—	2,328	8,042	12,850	—
3. スキー場部門	38,495	47,864	39,925	43,669	45,851	36,591	33,079	31,509	38,551	48,409	11,949

図表 施設別利用人数



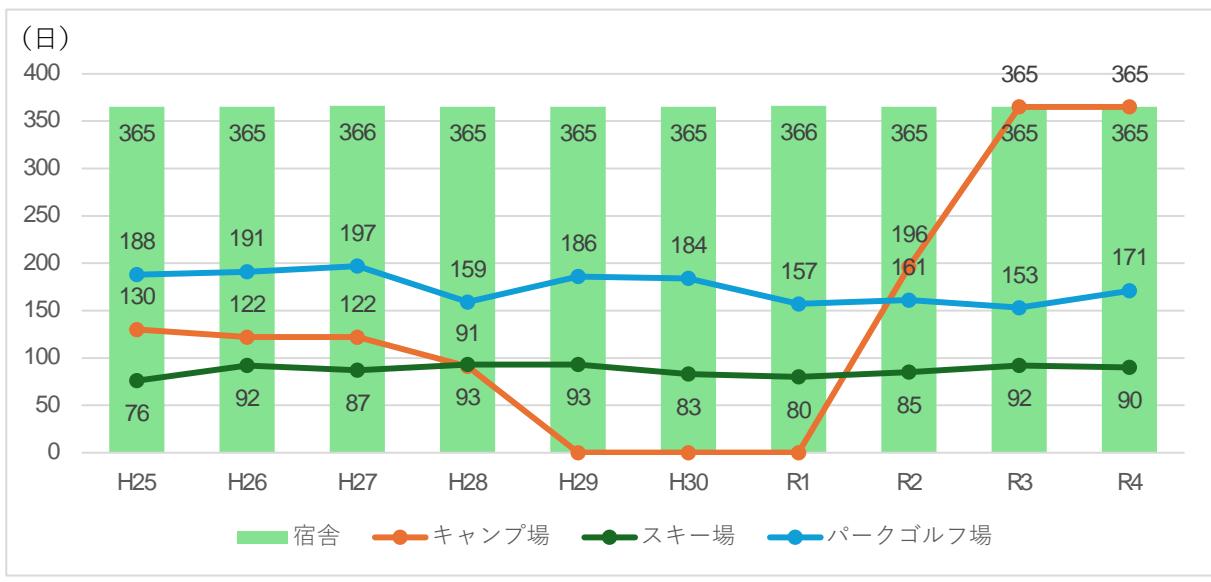
図表 施設別利用人数（宿泊・キャンプ抜粋）



	人										
	H25	H26	H27	H28	H29	H30	R1	R2	R3	R4	R6
宿泊人数	5,081	5,145	4,515	5,968	6,936	5,930	6,035	1,678	2,010	4,115	—
キャンプ場利用者数	2,777	2,325	2,583	2,124	H28台風被害により営業休止			1,521	4,552	4,110	—
リフト乗車人員	348,720	493,006	409,594	471,158	481,174	378,874	356,354	278,058	266,958	296,189	77,872

各施設の営業日数は、宿舎は年中無休、キャンプ場も令和3年度以降は年中無休となり、スキー場は90～100日程度、パークゴルフ場は180～200日程度となっている。

図表 各年度営業日数



	日										
	H25	H26	H27	H28	H29	H30	R1	R2	R3	R4	R6
宿舎	365	365	366	365	365	365	366	365	365	365	—
キャンプ場	130	122	122	91	H28台風被害により営業休止			196	365	365	—
スキー場	76	92	87	93	93	83	80	85	92	90	62
パークゴルフ場	188	191	197	159	186	184	157	161	153	171	—

② 1人当たり売上高

1人当たり売上高を見ると、宿泊は6,000円台後半となっており、食事を含まない売上となっている。このため1泊2食付きプランなどの2食分はレストラン（コロポックル）売上に計上されているものと考えられる。また宿泊料については条例により上限額が定められている。

キャンプ場は、平成28年度以前では1人当たり1,000円程度、令和2年度以降は増加傾向にあり、令和4年度では3,127円となっている。

スキー場（リフト代）は、乗車人数1人当たり100円前後で推移していたが、令和2年度以降は増加傾向になり、令和4年度では163円となっている。

図表 1人当たり売上高

	H25	H26	H27	H28	H29	H30	R1	R2	R3	R4	R6
宿泊	6,477	6,701	6,799	6,400	6,373	6,832	6,771	8,027	5,281	5,302	—
キャンプ場	932	1,073	1,072	1,107	H28台風被害により営業休止		1,531	1,767	3,127	—	
スキー場	110	97	97	93	95	97	93	113	144	163	153

【参考】芽室町国民宿舎等の設置及び管理運営に関する条例より抜粋

別表第1（第8条関係）

新嵐山荘利用料金

1 宿泊料の範囲（上限額）

区分	利用人员	宿泊料
大人	1人	7,150円
小学生	1人	5,720円
幼児		1,160円

備考

- 1 宿泊料には、食事料を含まないものとする。
- 2 幼児の宿泊料は、独立して寝具を1組使用した場合の料金とする。
- 3 年末年始（12月31日～1月3日）及び休日（日曜日及び国民の祝日に関する法律（昭和23年法律第178号）に規定する休日）の前日の場合は、大人1,100円以内、小学生880円以内の額を当該宿泊料に加算することができる。ただし、宿泊料の上限額以内とする。
- 4 個室に1人で宿泊する場合は、大人2,200円以内、小学生1,760円以内の額を当該宿泊料に加算することができる。ただし、宿泊料の上限額以内とする。

③ 1 営業日当り売上高

1 営業日当りの売上高を見ると、宿舎（全体）ではコロナ前の状況で25～27万円程度、令和2年度以降は10～20万円程度となっている。

キャンプ場は2万円程度、キー場は40～50万円程度となっている。

図表 1 営業日当り売上高

	H25	H26	H27	H28	H29	H30	R1	R2	R3	R4	R6
宿舎部門	260	277	249	252	287	270	252	103	126	185	—
キャンプ場部門	20	20	23	26	H28台風被害により営業休止			12	22	35	—
キー場部門	507	520	459	470	493	441	413	371	419	538	193

④ 1 営業日当り利用人数

1 営業日当りの利用人数を見ると、コロナ前の状況では、宿泊は15人程度、キャンプ場は20人程度、キー場は4,000～5,000人程度となっていた。令和2年度以降はコロナ禍の影響により全般的に低下し、宿泊は5～10人程度、キャンプ場は10人程度、キー場は3,000人前後となっている。

図表 1 営業日当り利用人数

	H25	H26	H27	H28	H29	H30	R1	R2	R3	R4	R6
宿泊	14	14	12	16	19	16	16	5	6	11	—
キャンプ場	21	19	21	23	H28台風被害により営業休止			8	12	11	—
キー場	4,588	5,359	4,708	5,066	5,174	4,565	4,454	3,271	2,902	3,291	1,256

閉鎖前の新嵐山スカイパーク概要（夏季）



- 場所:フィールド総合センター
●問い合わせ TEL:0155-65-2121

OUTDOOR FIELD MAP

日高山脈の山々が連なり、十勝平野がどこまでも広がる風景。新嵐山をベースに様々な遊びをご提案いたします。



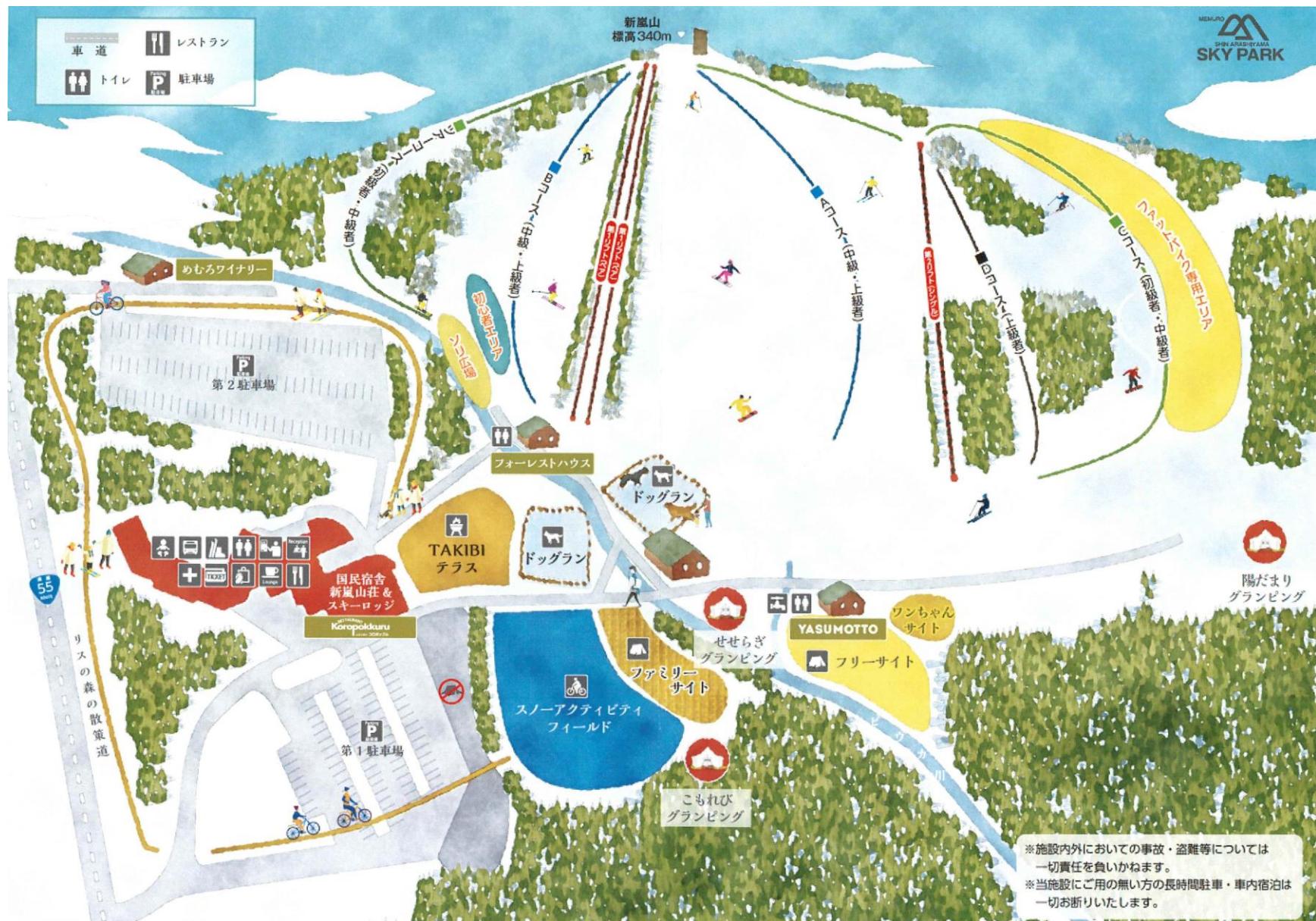
3



OUTDOOR FREE ACTIVITIES 屋外無料アクティビティ



閉鎖前の新嵐山スカイパーク概要（冬季）



(2) 目標利用人数の設定

これまでのデータを活用し、再整備後の施設ごとの目標利用人数を以下の通り設定した。

図表 目標利用人数

	目標利用人数
①スキー場来場人数	30,000人
②レストラン利用人数	12,000人
③キャンプ場利用人数	4,800人
④展望台利用人数（新規）	1,000人

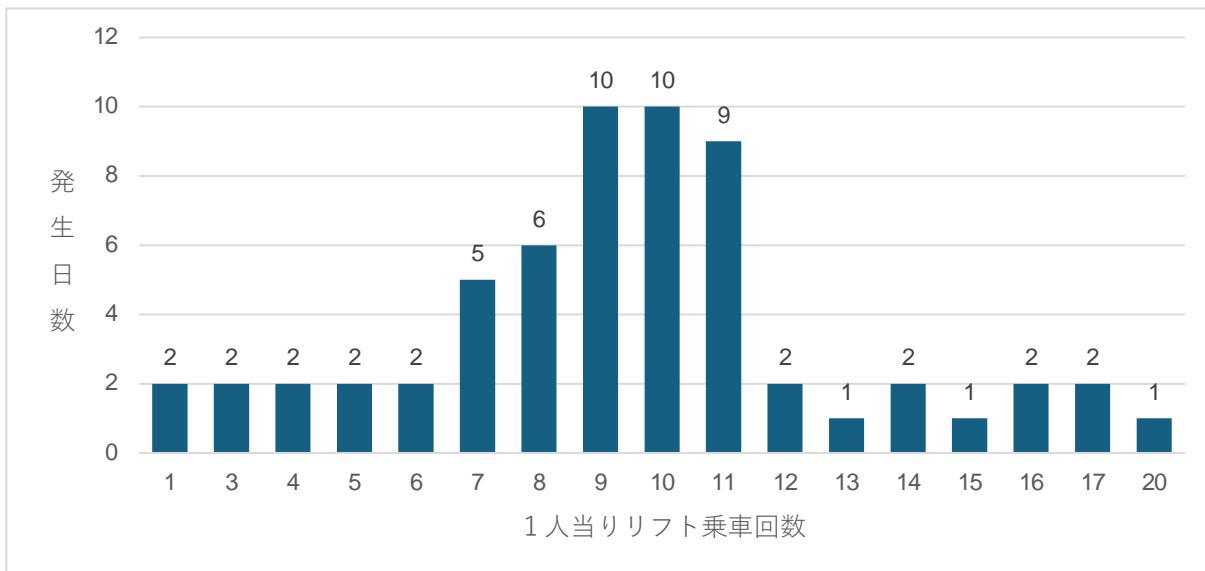
① スキー場

データで示されているスキー場の利用人数は、リフトに乗車した人員数であり、スキー場来訪者数として把握するためには、1人当たり何回リフトに乗車しているかの把握が必要であるが、令和4年度まではこれらのデータ集計を実施していない。

令和6年度については、データ集計を行っており、データは営業日1日単位で来場人数とリフト乗車人員のデータを把握していることから、これを用いて令和4年度以前の各年度のスキー場来場人数を推計する。

なお、令和6年度はプレオープンの位置づけで、シーズン券の販売がなく、ナイタ一営業も行っていないことなどから、各年度の推計値はあくまで参考値である。

図表 1人当たりリフト乗車回数と発生日数（令和6年度）



1人当たりリフト乗車回数は、当日の天候やゲレンデコンディションにも左右されるためバラツキが大きいが、9～11回程度乗車する場合が多いと考えられる。

令和6年度データでは、リフト乗車人員を来場人数総数で除すると8.4回が平均となる。

しかし令和6年度は雪不足でオープンが遅れ、コースも当初1コースのみのオープンとするなどの要素があり、1人当たりリフト乗車回数の発生頻度も合わせて考えると1人当たり10回乗車するとして、各年度の来場人数を推計した。

図表 リフト乗車人員とスキー場来場人数の推計

	H25	H26	H27	H28	H29	H30	R1	R2	R3	R4	R6
リフト乗車人員(人)	348,720	493,006	409,594	471,158	481,174	378,874	356,354	278,058	266,958	296,189	77,872
来場者数推計	34,900	49,400	41,000	47,200	48,200	37,900	35,700	27,900	26,700	29,700	7,800

※ 100人未満切上

リフト乗車人員は30～50万人で推移していたが、令和2年度以降は30万人以下となっており、コロナ過前までは回復していない状況にある。このため令和2年度以降の最近のデータを参考に目標スキー場来場人数を設定する。

スキー場来場人数は令和6年度のように、降雪量にも左右され、またスキーポートも減少しておりマーケット環境は厳しいが、一方で新たにセンターハウス棟の建設やリフト設備の更新が計画などを踏まえ、目標スキー場来場人数をコロナ過後の回復傾向にあった令和4年度と同程度の30,000人、リフト乗車人員を30万人と設定する。

② レストラン

レストランについては、「新嵐山スカイパーク再生基本構想」の中で「飲食、売店については、屋内遊戯施設とともに整備することで通年での集客につなげるものであり、屋内遊戯施設の検討とあわせて設置を検討する」とされている。

今回、屋内遊戯施設の導入を見送ったことで、レストランについてはセンターハウス棟に併設する方針としており、冬期のスキーポートを中心とした運営を前提に検討する。

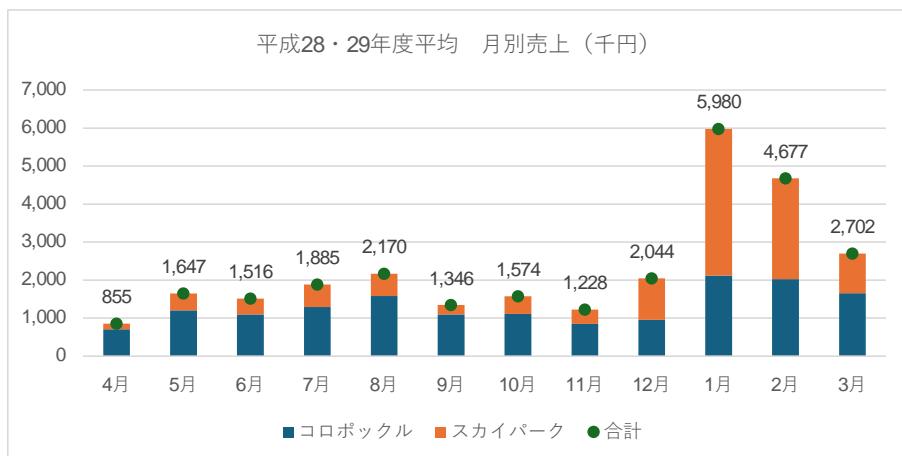
月別の売上データがある平成28・29年度の状況を整理すると、レストランは冬期のスキーポートの利用が多いことから、1月の売上が最も多い。

特にスキー場のレストランとしての性格が強いスカイパーク（1F）では冬期（12月～3月までの4か月間）の売上比率（2か年平均）は72.5%と7割を超え、宿泊客の利用をベースに持つコロポックル（2F）とは状況は大きく異なる。

図表 平成28・29年度 レストラン月別売上

		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	計
H28	コロポックル	390	868	755	734	941	636	678	524	579	1,353	1,361	1,088	9,907
	スカイパーク	81	317	293	416	414	121	342	182	682	2,495	1,708	704	7,754
	合計	470	1,185	1,047	1,151	1,355	757	1,020	706	1,261	3,848	3,069	1,791	17,661
H29	コロポックル	634	678	681	1,117	1,280	925	872	644	755	1,535	1,331	1,134	11,586
	スカイパーク	135	246	256	351	351	252	236	399	810	2,728	1,885	688	8,337
	合計	769	924	937	1,467	1,631	1,177	1,108	1,043	1,566	4,263	3,216	1,822	19,923
H28-29 平均	コロポックル	706	1,207	1,095	1,293	1,581	1,099	1,114	847	957	2,121	2,026	1,655	15,700
	スカイパーク	148	440	421	592	589	247	460	381	1,087	3,859	2,651	1,047	11,923
	合計	855	1,647	1,516	1,885	2,170	1,346	1,574	1,228	2,044	5,980	4,677	2,702	27,623
H28-29 構成比	コロポックル	4.5%	7.7%	7.0%	8.2%	10.1%	7.0%	7.1%	5.4%	6.1%	13.5%	12.9%	10.5%	100.0%
	スカイパーク	1.2%	3.7%	3.5%	5.0%	4.9%	2.1%	3.9%	3.2%	9.1%	32.4%	22.2%	8.8%	100.0%
	合計	3.1%	6.0%	5.5%	6.8%	7.9%	4.9%	5.7%	4.4%	7.4%	21.6%	16.9%	9.8%	100.0%

図表 平成28・29年度平均 レストラン月別売上



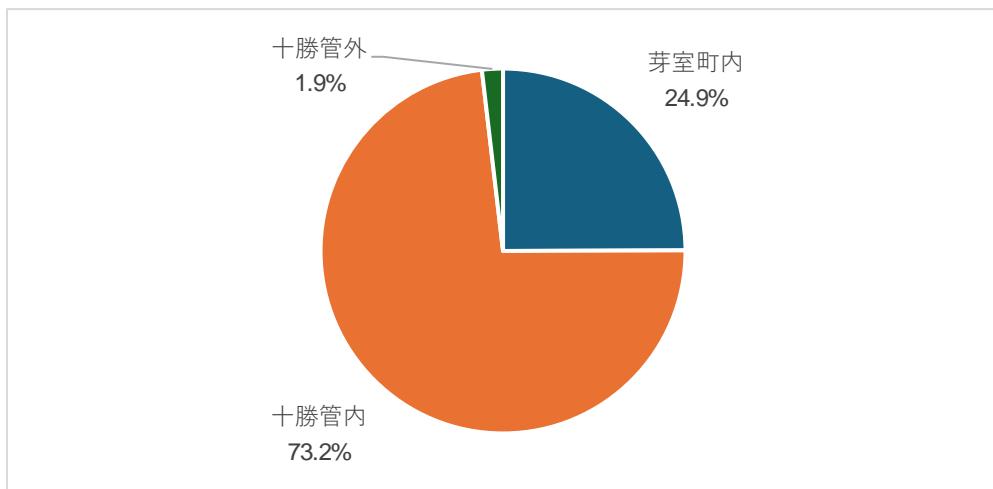
スカイパーク（1F）はキャンプ場や宿泊の入込ピーク時である8月の売上であっても、1日当たりの売上は1万円強であり、今後の新嵐山スカイパークの運営を考えると、センターハウス棟に併設するレストランは、通年での運営は困難であり、スキー場がオープンする12月～3月の冬期間を対象に営業することを前提に、目標利用人数を設定することとし、スキー場来場者数に対し、レストランの利用率を設定して算出する。

メムロスキー場は、来場者のほとんどが十勝地域の住民であることや日帰りスキーフィールドであること、ファミリーゲレンデで家族でお弁当などを持参して利用するなど、利用者すべてがレストランを利用することは考えにくい。

このため、スキー場来場者のレストラン利用率は30%～50%程度で検討することが妥当と考えられる。

ここではスキー場来場者数の目標人数30,000人に対し、利用率を40%として、レストランの目標利用人数を12,000人と設定する。

図表 令和6年度スキー場来場者の居住地域



③ キャンプ場

キャンプ場については、平成28年度以前と令和2年度以降ではキャンプ場の場所も違い、また令和3年度以降は冬期も含め通年営業となっていることから、直近の通年営業した令和3・4年度の利用人数の平均値とすると、年間約4,400人となる。

一方、キャンプ場の通年営業の取組は始まったばかりであり、今後簡易施設（トレーラーハウス等）など、テント泊以外でも滞在可能な施設整備を進めることでさらに通年での利用増も期待できる。

このことから、年間4,400人をベースに、冬期間（12～3月）の利用を400人（100人/月）の増加を目標年、キャンプ場利用人数を4,800人と設定する。

図表 令和3・4年度 キャンプ場利用人数

	R3	R4	平均※
キャンプ場利用者数	4,552	4,110	4,400

※100人未満切上

④ 展望台（新規）

リフトの統合、更新によりリフトによる展望台へのアクセスが可能となる。展望台についてはリフトの夏季運行を見込み、頂上に滞在する機能を検討する。

このため、今後の目標としてリフト夏季運行（6月～9月の4か月間を想定）による展望台の利用人数を1,000人（1か月当たり250人）と設定する。

(3) 月別利用人数の検討

「①スキー場来場人数」及び「②レストラン利用人数」については、令和元年度～4年度までの月別リフト乗車人員の平均値から構成比を算出し、目標人数に乘じて算出する。

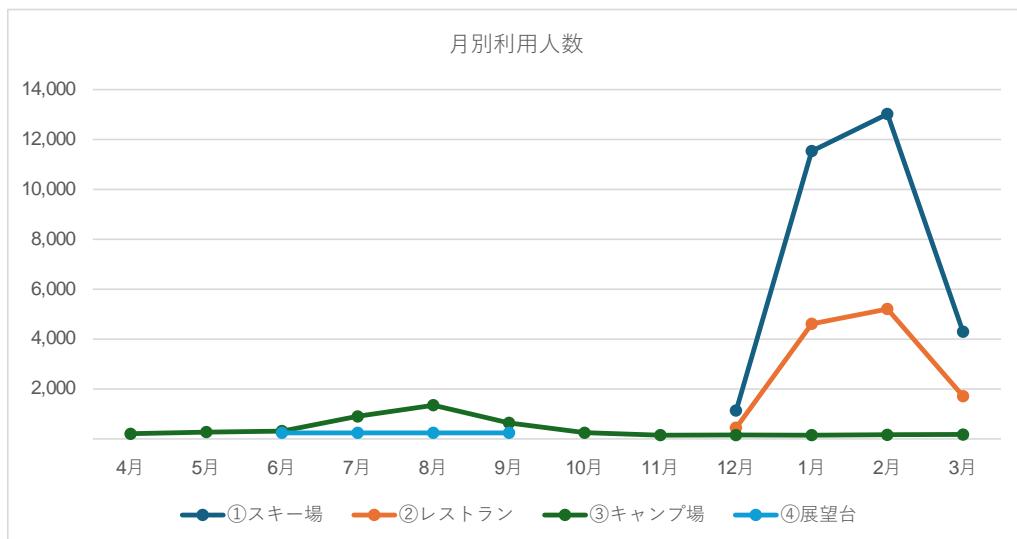
「③キャンプ場利用人数」については、通年営業を実施した令和3・4年度の月別利用人数の平均値から構成比を算出する。次にベースとする4,400人に乗じて月別利用人数を割り振り、その後冬期間（12～3月）の利用増加目標として月ごとに100人加えて算出する。

「④展望台利用人数」については、リフト夏季運行期間（6月～9月の4か月間を想定）の利用人数として、1か月当たり250人として設定する。

図表 月別利用人数

		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	計
リフト乗車人員 (千人)	R1									16	123	179	38	356
	R2									10	121	106	41	278
	R3									3	95	114	55	267
	R4									17	121	121	37	296
	R1-4平均									11	115	130	43	299
	構成比									3.8%	38.5%	43.4%	14.3%	100.0%
キャンプ場 利用人数 (人)	R3	138	179	135	1,091	1,587	699	266	167	77	62	78	73	4,552
	R4	281	367	494	696	1,083	579	235	141	45	44	57	88	4,110
	R3-4平均	210	273	315	894	1,335	639	251	154	61	53	68	81	4,331
	構成比	4.8%	6.3%	7.3%	20.6%	30.8%	14.8%	5.8%	3.6%	1.4%	1.2%	1.6%	1.9%	100.0%

	目標人数	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
①スキー場	30,000									1,138	11,536	13,027	4,299
②レストラン	12,000									455	4,614	5,211	1,720
③キャンプ場	4,800	213	277	320	908	1,356	649	254	156	162	154	169	182
	4,400	213	277	320	908	1,356	649	254	156	62	54	69	82
	400									100	100	100	100
④展望台	1,000			250	250	250	250						
合計	47,800	213	277	570	1,158	1,606	899	254	156	1,755	16,304	18,407	6,201



IV-3 施設規模の検討

施設規模を検討するため、ピーク時の入込状況について、平日と休日の入込比を設定し、月別の平日・休日日数から平日・休日別の入込数を算出する。

図表 月別利用者数・月別平日・休日日数

区分	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	計
①スキー場									1,138	11,536	13,027	4,299	30,000
②レストラン									455	4,614	5,211	1,720	12,000
③キャンプ場	213	277	320	908	1,356	649	254	156	162	154	169	182	4,800
④展望台			250	250	250	250							1,000
合計	213	277	570	1,158	1,606	899	254	156	1,755	16,304	18,407	6,201	47,800
月別構成比	0.4%	0.6%	1.2%	2.4%	3.4%	1.9%	0.5%	0.3%	3.7%	34.1%	38.5%	13.0%	100.0%
営業日(日)	30	31	30	31	31	30	31	30	31	31	28	31	365
平 日(日)	21	21	21	21	16	19	22	20	20	16	18	20	235
休 日(日)	9	10	9	10	15	11	9	10	11	15	10	11	130

平日・休日は夏休み等も踏まえ仮定

平日・休日の入込比については、令和6年度の平日・休日別のスキー場来場人数の実績を参考に1：4と仮定し、1日当たりの利用人数を算出する。

図表 令和6年度平日・休日別のスキー場来場人数

	来場人数	日数	1日当たり来場人数
休日	5,769	22	262
平日	3,115	42	74
合計	8,884	64	139

(休日来場人数) / (平日来場人数)	3.5
---------------------	-----

図表 スキー場・レストラン 平日・休日1日当たり利用人数

休日は平日の **4** 倍の利用者数と仮定

スキー場	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
平 日(人/日)									18	152	225	67
休 日(人/日)									71	607	898	269

レストラン	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
平 日(人/日)									7	61	90	27
休 日(人/日)									28	243	359	108

スキー場、レストランの入込ピークは1・2月で、2月の休日でスキー場が約900人、レストランが約360人の利用が想定される。

スキー場については、現在リフトの更新が想定されており、輸送能力は毎時1,200人の設備が検討されている。ピーク時は900人の来場が想定されるが、分散して来場することや自動ゲートの活用により、リフトの利用には支障がないものと考える。

レストランについては、営業時間を11時～14時と設定し、時間帯ごとの配分比を設定し、ピーク時の入込状況を想定する。

平日ピークは22人程度であるが、休日ピークは90人程度の入込が想定される。一方ピーク時に合わせた席数設定は、施設規模が過大となる。

このため、レストランの席数については、50席程度とし、ピーク時にはフリースペースを活用するなどして対応することが考えられる。

図表 レストラン入込想定

レストラン平日	12月	1月	2月	3月	配分比
11:00-11:30	1	6	9	3	10.0%
11:30-12:00	1	12	18	5	20.0%
12:00-12:30	2	15	22	7	25.0%
12:30-13:00	1	12	18	5	20.0%
13:00-13:30	1	9	13	4	15.0%
13:30-14:00	1	6	9	3	10.0%
レストラン休日	12月	1月	2月	3月	配分比
11:00-11:30	3	24	36	11	10.0%
11:30-12:00	6	49	72	22	20.0%
12:00-12:30	7	61	90	27	25.0%
12:30-13:00	6	49	72	22	20.0%
13:00-13:30	4	36	54	16	15.0%
13:30-14:00	3	24	36	11	10.0%

キャンプ場は8月がピークであるが、キャンプ場は宿泊を伴うことから、スキー場の平休比より休日比率が高くなることが考えられる。

このため、仮に平休比を1:8とスキー場の倍で設定すると、ピーク時利用人数は約80人程度となる。ソロキャンパーからファミリー・グループキャンパーまで利用者層は様々に想定されるが、1グループの平均人数を3人程度とすると全体で30サイト程度あれば収容可能と考えられる。

なお、キャンプスタイルもさまざまであり、選択肢を限定的にした場合、利用増やリピーター増につながらないため、サイト数は余裕を持った設定が望ましい。

図表 キャンプ場 平日・休日1日当たり利用人数

休日は平日の **8** 倍の利用者数と仮定

キャンプ場	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
平 日(人/日)	2	3	3	9	10	6	3	2	2	1	2	2
休 日(人/日)	18	22	28	72	80	49	22	12	12	9	14	13

リフト夏季運行による展望台利用については、休日のみの運行と想定し、1日当たりの利用人数を算出する。

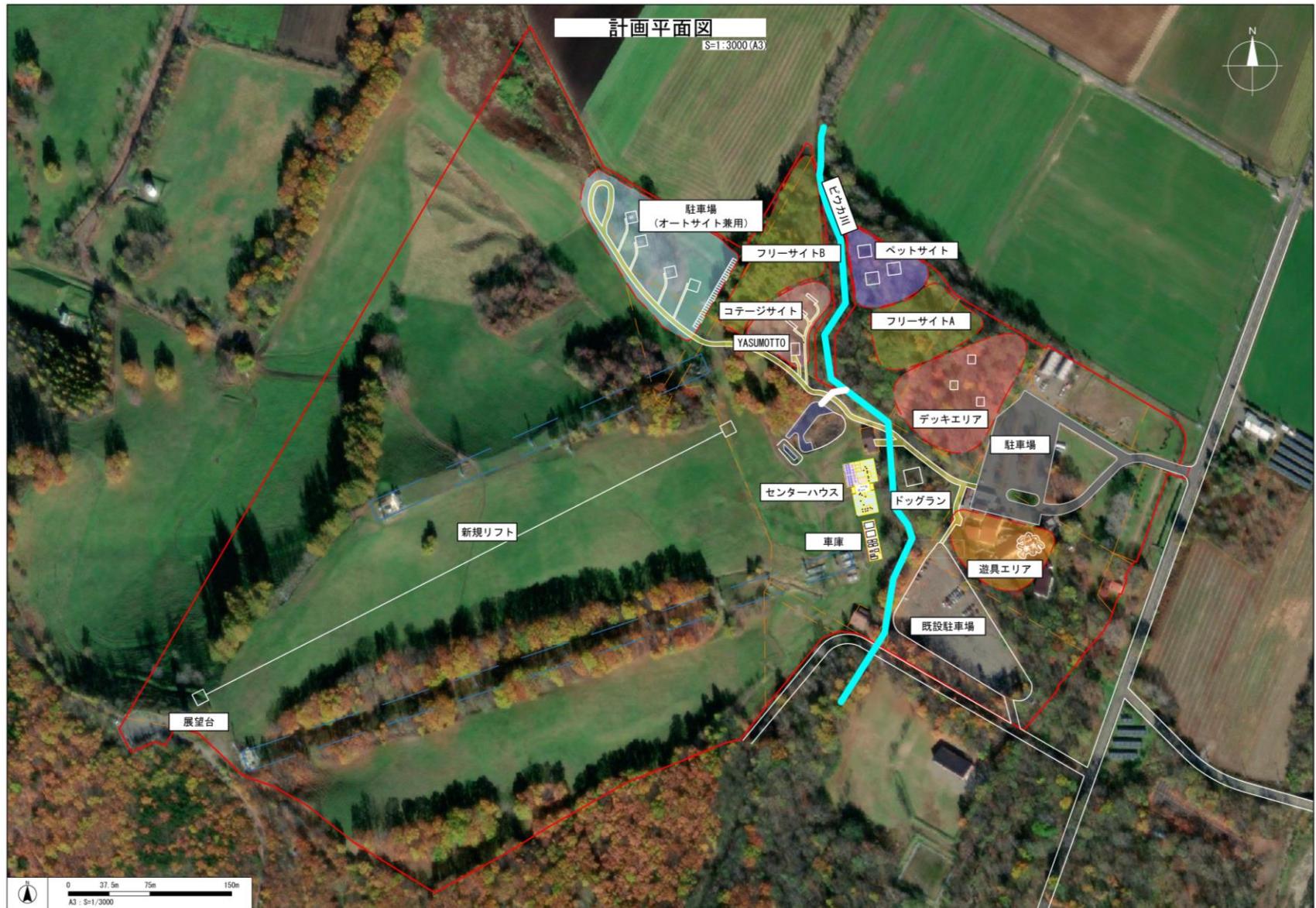
図表 展望台 平日・休日1日当たり利用人数

休日のみの運行を想定

展望台	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
平 日(人/日)			—	—	—	—						
休 日(人/日)			28	25	17	23						

IV – 4 配置計画と動線計画

— 42 —



IV-5 全体再整備計画

(1) スキー場

スキー場はロッジ（センターハウス）の再整備、リフト更新を行う。

ロッジについては、事務所や受付、スキーパトロール、レンタル、スキースクール、更衣室、飲食・休憩スペース、売店等を整備し、一般利用者、スキーヤーの動線を明確化する。

また、リフトについては、現在の第1リフト（A線、B線）、第2リフトを1本に統合するとともに、Aコース、Cコースといった各コースの利用者の動線により、乗車位置を設定する。降車場所は展望台エリアを想定し、リフトの夏季利用を可能にする。

(2) キャンプ場

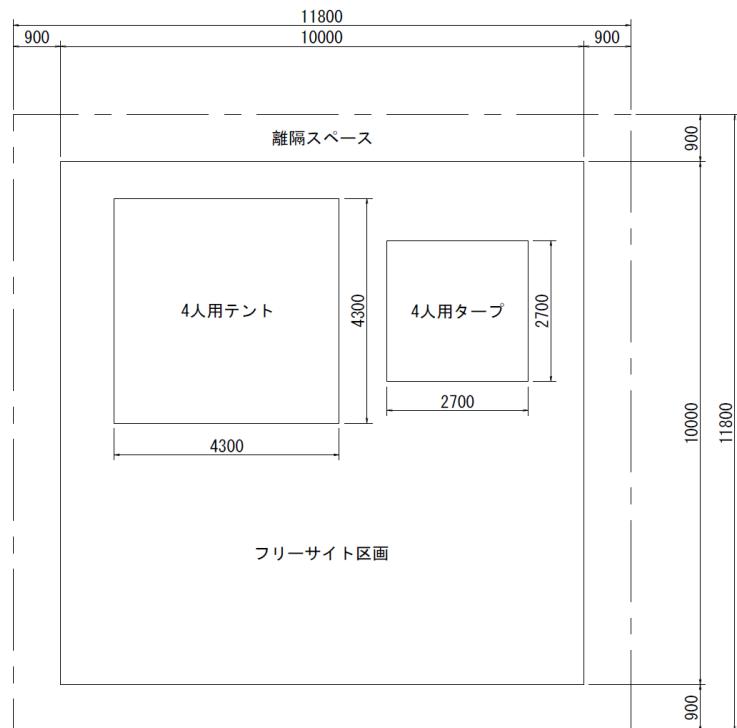
キャンプ場は、フリーサイトのほかにデッキエリア、コテージサイト、ペットサイトを整備する。

① フリーサイト

フリーサイトの区画サイズに明確な基準はないことから、オートサイトの必要面積である100m²以上を参考としながら下図のとおり区画サイズを設定した。

エリア内の高木の影響を考慮し、85区画程度を整備する想定としている。

図表 フリーサイトの寸法



【参考】都市公園におけるオートキャンプ場の計画指針（建設省）

(1) テントサイト

- ① テントサイトは駐車スペースとテント設営・休憩スペースにより構成され、1サイトの規模は概ね100m²以上を標準とする。
- ② 各サイトの配置に当たっては、地形や植生等の自然環境を有効に活用し、これらとの調和を図り、機械的、画一的な景観を形成しないよう十分留意する。

テントサイトは、駐車スペースとテント設営・休憩スペースにより構成され、植栽等修景スペースをのぞいて、1サイトの規模は概ね100 m²以上を標準とする。

サイト区画は、境界杭・鉢等による明示や部分的な植栽を用いて利用区画を明確にする。

但し、各サイトの配置にあたっては、地形を有効に活用し、これらと調和を図り、機械的、画一的な景観を形成しないよう配慮する必要がある。

テントサイト ≈ 駐車スペース + テント設営・休憩スペース
(約100 m²以上) (約15m²) (約85m²以上)

(2) オートサイト

10m四方で100m²程度の区画とし、フリーサイトの奥に4区画整備する想定とした。

【参考】イメージ写真（網走市キャンプ場のオートサイト）



③ デッキサイト

木製デッキステージの上にテントを張るサイトとして、デッキサイトを3区画整備する想定とした。

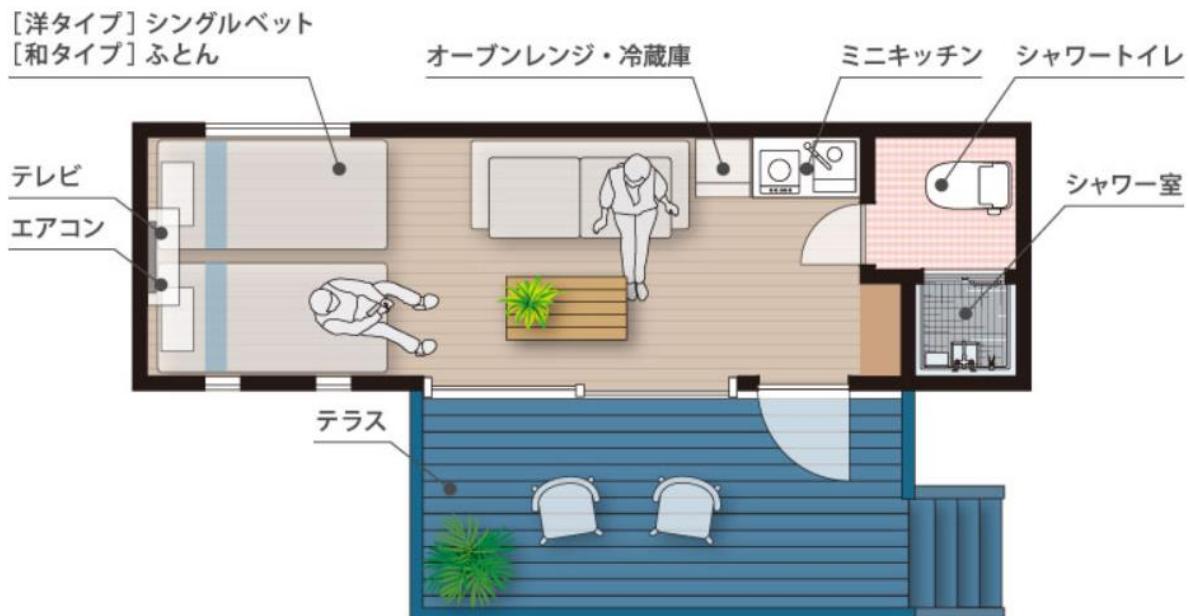
【参考】イメージ写真（ニセコ町キャンプ場）



④ コテージサイト

テントを持ち込むことなく宿泊できるサイトとして、他サイトとの差別化を図り、利用を促進するため管理施設「YASUMOTTO」の近くに配置し、3区画整備する想定とした。

【参考】イメージ写真（おけとトレーラーハウス）



⑤ ペットサイト

ペットと一緒に宿泊できるサイトとして、12m×12m程度のサイトを3区画整備する想定とした。区画内からペットが出ないように、高さ1.5mのメッシュフェンスを設置し、鳴き声等に配慮し、一般のサイトとは一定程度離隔を設けることとしている。

【参考】イメージ写真（北広島市キャンプ場）



(3) 屋外遊具エリア

新嵐山スカイパークの自然環境と親和性の高い、アスレチック機能を重視した遊具を整備する。

また、利用者から再開要望の多いドッグランについては、既存のドッグランを再利用する形で整備することとする。

(4) 駐車場

老朽化した箇所の補修等を行い解体予定の国民宿舎新嵐山荘の跡地利用（屋外遊具、ドッグラン）やスキー場、キャンプ場利用者の利用しやすいレイアウトとするため、区画線の見直し等を行う。

また、町内外からのイベント活用は今後も継続して対応する。

(5) 展望台

現在の展望台を活かすため長寿命化工事を実施するとともに、リフトの夏季運行を見込み、頂上に滞在する機能（使用不可となっているトイレ撤去及び新たなトイレ設置やテラス席の設置等）を検討する。

また、スキーシーズンは展望台（駐車場）から各コースにスキーヤーが移動するが、Cコースについては、展望台（駐車場）からの動線がないため、新たな動線を造成する。

なお、これまででも要望の多い、展望台での飲食（レストラン等）の設置は、給排水工事が必要であり、費用の面からも困難であるが、イベント時における簡易施設やキッチンカーの設置は今後も対応する。

V 拠点施設整備計画

V-1 拠点施設整備の基本的考え方

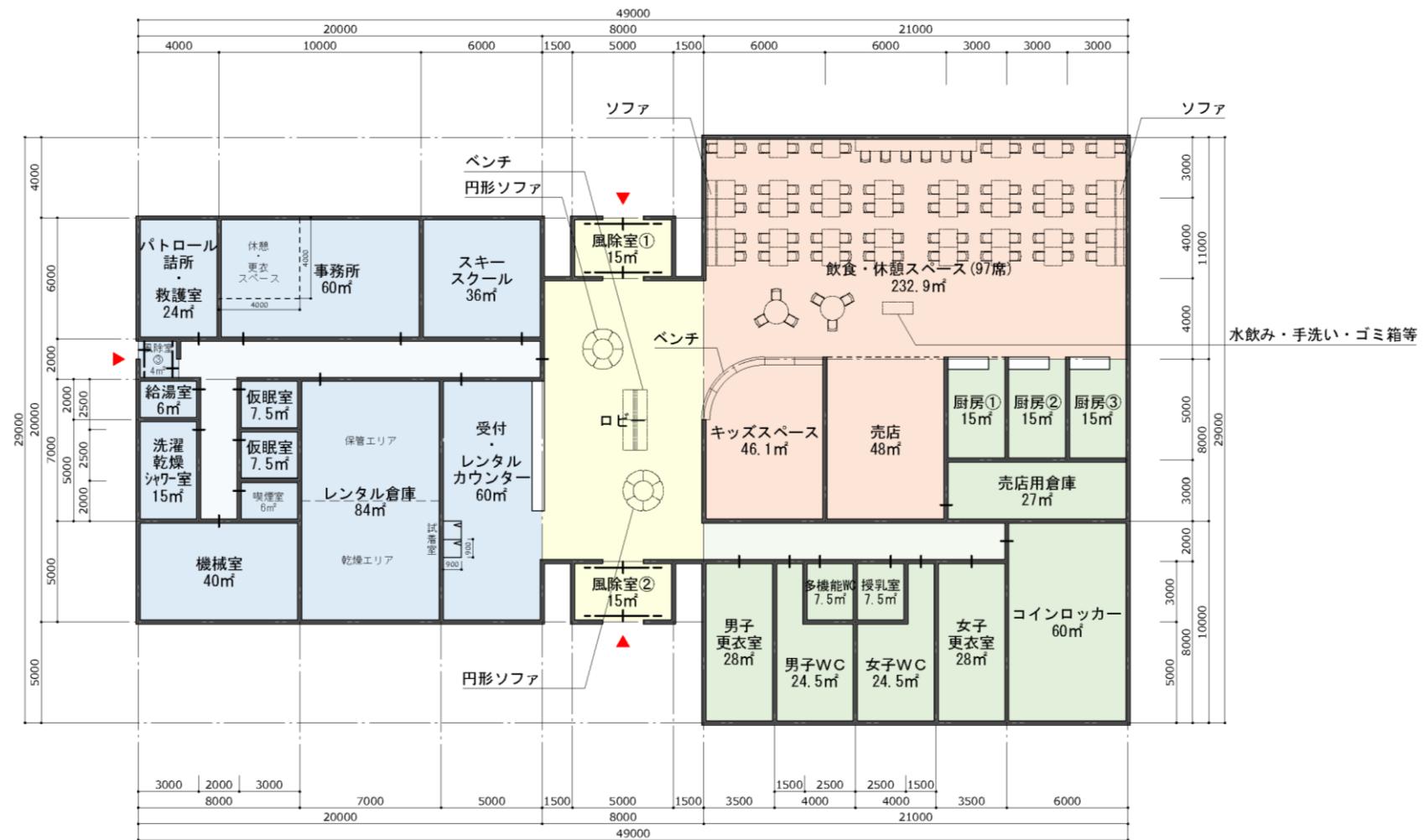
新嵐山スカイパーク全体再整備計画をふまえ、拠点施設として整備するセンターハウスについて、次の考え方により整備を進める。

- ・スキーヤーの動線（駐車場からセンターハウス、センターハウスから更新後のリフト）を意識した配置とし、利便性を高める
- ・受付（スキーやキャンプ等）、売店、スキースクール、レンタル、パトロールなど、指定管理者やキー団体（スキースクール、少年団等）の効率的な運営が可能なレイアウトにする
- ・飲食、休憩エリアは厨房併設とし、フードコートのテナントのように夏、冬ともに事業者の入れ替えを可能にする
- ・スキー場がクローズしている期間は、地域行事等で利用可能とし、利用者や利用者が手配したケータリング事業者が厨房を利用可能とする
- ・キッズスペースや授乳室、多機能トイレなどを整備し、年齢や性別を問わず、さまざまな利用者が快適に過ごせる施設とする
- ・仮眠室やシャワー室等を整備し、働く人にとっても快適な施設とする

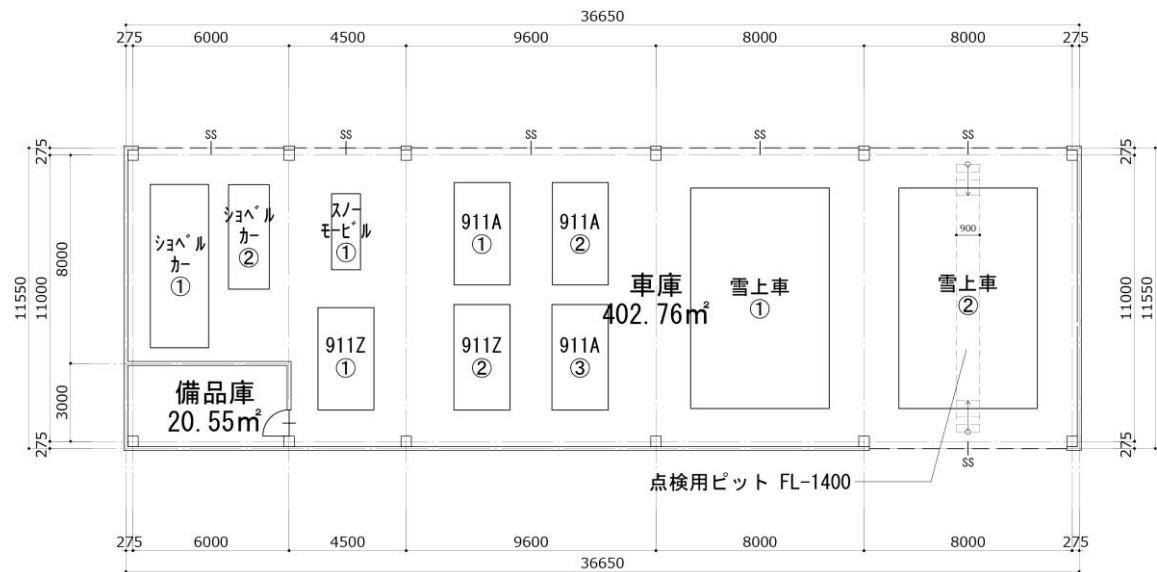
V – 2 配置計画



V - 3 平面・立面計画



1階平面図 A3=1/300



V - 4 面積表

センターハウスの面積は下表の通りである。

図表 センターハウス面積表

区分	室名	面積 (m ²)
一般利用	キッズスペース	46.1
	飲食・休憩スペース	232.9
	売店	48.0
小計		327.0
事務	事務所	60.0
	仮眠室	15.0
	洗濯・乾燥・シャワー室	15.0
	喫煙室	6.0
	廊下	50.0
	スキースクール	36.0
	パトロール詰所 救護室	24.0
	レンタル倉庫	84.0
	受付・レンタルカウンター	60.0
	風除室③	4.0
小計		354.0
サービス・共用	ロビー	112.0
	風除室①	15.0
	風除室②	15.0
	売店用倉庫	27.0
	厨房①	15.0
	厨房②	15.0
	厨房③	15.0
	コインロッカー	60.0
	男子更衣室	28.0
	女子更衣室	28.0
	多機能WC	7.5
	男子WC	24.5
	女子WC	24.5
	給湯室	6.0
	授乳室	7.5
	機械室	40.0
	廊下	30.0
	小計	
合計		1151.0

VI 事業計画の検討

VI-1 概算事業費

本計画策定時点では拠点施設全体の整備費用は約24億円程度となる想定であり、屋外遊具は約0.4億円、キャンプ場で約1.8億円、駐車場で約0.6億、センターハウス（車庫含む）で約16億円、リフト更新で約4.5億円、展望台で約0.8億円の費用となることが見込まれる。

また、国民宿舎等の既存施設の解体は約5.5億円程度となる見込みで、本計画における概算事業費の総額は約30億円となる想定である。

なお、整備にあたっては、国や北海道の制度との連携、交付税措置のある起債の活用などで可能な限り町負担を軽減する。

図表 概算事業費

施設名	規模・数量	概算事業費（千円）
屋外遊具	複合遊具1基（アスレチック等）	35,700
キャンプ場	フリーサイト85区画 オートサイト4区画 デッキサイト3区画 コテージサイト3区画 ペットサイト3区画	181,000
駐車場	緑地帯約1,000m ² と照明灯7本の撤去	55,000
スキー場ロッジ	センターハウス約1,200m ² 車庫約400m ²	1,611,500
スキー場リフト		450,000
展望台		80,000
既存施設解体	車庫1棟、国民宿舎、芽室スキー場ロッジ、芽室スキー場管理棟、森と木の里休憩室	550,000
合計		2,963,200

※基本計画における公園施設整備（既存施設の解体含む）に係る町の負担は

351,320千円（概算事業費－補助金－起債に対する交付税措置）

（起債償還期間を10年とした場合の年間の負担は 35,132千円／年）

VI-2 運営収支概算

目標入込客数をベースに、キャンプ場、レストラン、売店等の売上見込を概算するとともに、施設の維持・管理費用、運営費用を概算し、大まかな運営収支を把握する。

なお、運営収支概算にあたっては、令和8年度から令和12年度の指定管理者募集の際に設定した指定管理料基準額（79,904千円）を基に、再整備後の町の負担を算定する。

■歳出（指定管理委託料）

単位：千円

項目	金額
R8～R12 指定管理料基準額	79,904
増 キャンプ場・遊具・ドッグラン等	20,000
減 スキー場リフト運営	△4,500
合計	95,404

■歳入（利用料）

単位：千円

項目	金額
R7予算 リフト使用料	26,813
増 リフト使用料	5,000
増 キャンプ場使用料	10,000
合計	41,813

基本計画における概算運営費の町負担は 53,591千円／年（歳出－歳入）

VI－3 事業スケジュールの検討

事業スケジュールは以下のとおりとするが、国や北海道の制度との連携や企業版ふるさと納税等による財源確保により町財政への負担軽減を図りながら進める。

1 既存施設

	施設名	内容	令和7年度	令和8年度	令和9年度	令和10年度	令和11年度
1	新嵐山荘	解体	設計			工事着工・完了	
2	旧管理棟 フォレストハウス	解体	設計				工事着工・完了

2 都市公園における公園施設整備

	施設名	内容	令和7年度	令和8年度	令和9年度	令和10年度	令和11年度
1	屋外遊具・ドッグラン	整備	長寿命化計画			設計	工事着工・完了・オープン
2	キャンプ場	再整備	長寿命化計画		設計	工事着工・完了	オープン
3	スキー場ロッジ	再整備	長寿命化計画	設計	工事着工	工事完了・オープン	
4	スキー場リフト	更新	長寿命化計画	設計	工事着工	工事完了・オープン	
5	展望台	長寿命化	長寿命化計画		設計	工事着工・完了・オープン	

3 都市公園エリア外(民間活用ゾーン)

	施設名	内容	令和7年度	令和8年度	令和9年度	令和10年度	令和11年度
1	第3駐車場及び 旧オートキャンプ場	民間活用		サウンディング調査	公募		

VI－4 事業手法

今後の施設整備にあたっては、民間活力を最大限活用するため、公民連携手法の1つであるE O I方式を採用する。

※ E O I 方式・・・Early Operator Involvement

運営重視型の公民連携手法の1つで、施設整備などのプロジェクトの初期段階から（設計、建設に先立ち）運営事業者を関与させることにより、運営フェーズでの民間ノウハウをあらかじめ反映させて、より質の高いサービスの提供や、ライフサイクルコスト、管理運営を見据えた施設整備などを目指すもの。